

With コロナ時代における研究に関する状況
とニーズと学会活動のあり方についての調査
報告書

令和6年3月

目 次

I 調査の概要	1
1 調査の目的	3
2 調査の設計及び回収結果	3
3 アンケートの調査項目	3
4 調査結果をみる上での注意事項	3
II 調査結果	5
1 学会加入状況	7
(1) 入会数	7
(2) 社会福祉系学会連合の加入状況	8
(3) 社会福祉系学会連合のメイン学会	9
(4) その他の学会加入状況	10
2 基本属性	11
(1) 性別	11
(2) 年齢	12
(3) お住まいの地域	13
(4) 中心にしている領域	13
(5) 現在勤務している組織	15
(6) 勤務先における立場	16
(7) 勤務形態	17
(8) 任期の有無	18
(9) 学生のうちの留学生の割合	19
3 学会全国大会への参加に関する状況	20
(1) メイン学会の全国大会参加の開催方法	20
(2) メイン学会の全国大会参加の開催方法の選択理由	21
(3) メイン以外の学会の全国大会参加の開催方法	22
(4) メイン以外の学会の全国大会参加の開催方法の選択理由	23
(5) メイン学会の全国大会参加の発表方法	24
4 学会全国大会における倫理審査規定	25
(1) 倫理審査規定への対応に困った経験の有無	25
5 コロナ禍による経済面への影響	26
(1) 経済面への影響度	26
(2) 経済面への影響を受けた内容	27
6 コロナ禍による生活への影響	28
(1) 生活への影響の有無	28
(2) 生活への影響を受けた内容	29

7	コロナ禍での研究活動	30
(1-1)	アンケート調査の実施有無	30
(1-2)	アンケート調査の実施方法	31
(1-3)	アンケート調査を実施できなかった際にとった対応	32
(2-1)	インタビュー調査の実施有無	33
(2-2)	インタビュー調査の実施方法	34
(2-3)	インタビュー調査を実施できなかった際にとった対応	35
(3)	研究活動場所	36
(4)	研究活動におけるコロナ禍の影響度	37
(5)	影響を受けた具体的な内容	38
(6)	パンデミックが起きた際の停滞を防ぐ支援	39
8	コロナ禍を経た学会活動に関する課題	40
(1)	学会活動に関する課題内容	40
9	社会福祉連合もしくは各学会による研究支援	41
(1)	研究支援に関する希望内容	41
III	自由記述	43

I 調査の概要

1 調査の目的

本調査では、社会福祉系学会連合に加盟する 22 学会に所属する会員に対して、With コロナ時代における研究に関する状況とニーズを明らかにし、今後の学会活動の指針を得ることを目的とします。

2 調査の設計及び回収結果

本調査の実施方法は以下のとおりです。

① 調査対象	社会福祉系学会連合加盟学会（22 学会）の会員
② 有効回答数	641 件
③ 調査方法	ネット調査
④ 調査期間	令和 6 年 2 月 1 日～2 月 29 日
⑤ 調査機関	株式会社サーベイリサーチセンター

3 アンケートの調査項目

- ① 学会加入状況
- ② 基本属性
- ③ 学会全国大会への参加に関する状況
- ④ 学会全国大会における倫理審査規定
- ⑤ コロナ禍による経済面への影響
- ⑥ コロナ禍による生活への影響
- ⑦ コロナ禍での研究活動
- ⑧ コロナ禍を経た学会活動に関する課題
- ⑨ 社会福祉連合もしくは各学会による研究支援

4 調査結果をみる上での注意事項

- ① 回答は n（有効回収数）を基準とした百分率で表わし、小数点第 2 位を四捨五入しました。
このため、百分率の合計が 100%にならない場合があります。
- ② 集計結果の表やグラフでは、コンピューター入力の都合上、回答の選択肢の言葉を短縮して表現している場合があります。

Ⅱ 調査結果

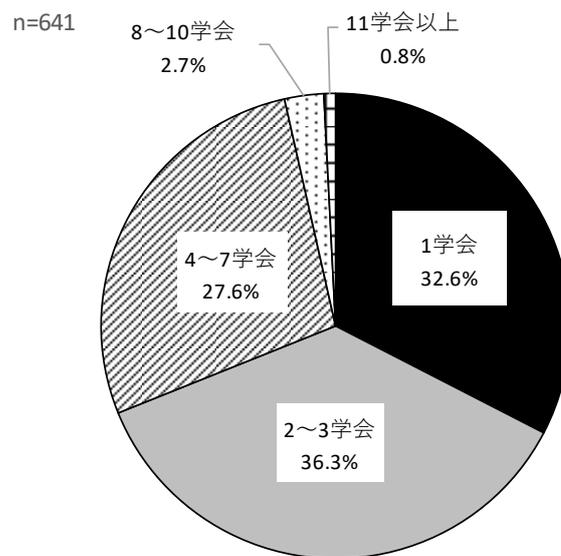
1 学会加入状況

学会加入状況に関して、以下の質問にお答えください。

(1) 入会数

「2～3 学会」(36.3%)が最も高く、次いで「1 学会」(32.6%)、「4～7 学会」(27.6%)の順になっています。

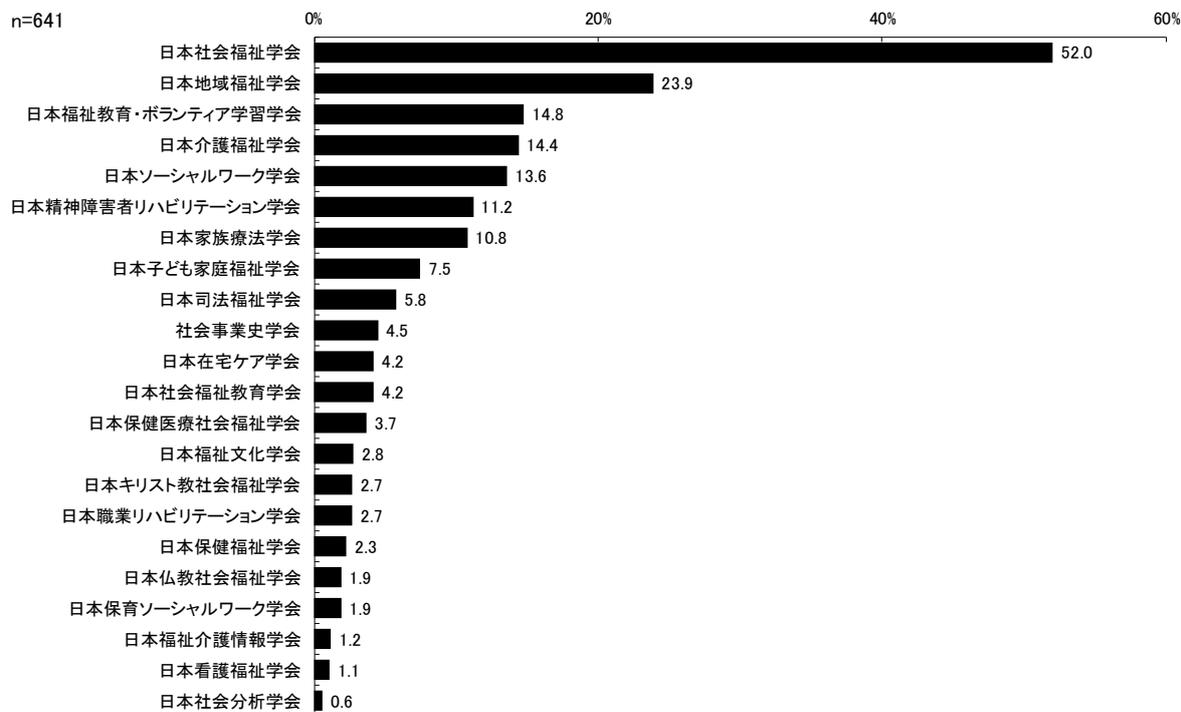
□ Q1-1. あなたは、現在、いくつの学会(Q1-2)に挙げる社会福祉系学会連合加盟学会を含めた数)に入会していますか。



(2) 社会福祉系学会連合の加入状況

「日本社会福祉学会」(52.0%)が最も高く、次いで「日本地域福祉学会」(23.9%)、「日本福祉教育・ボランティア学習学会」(14.8%)の順になっています。

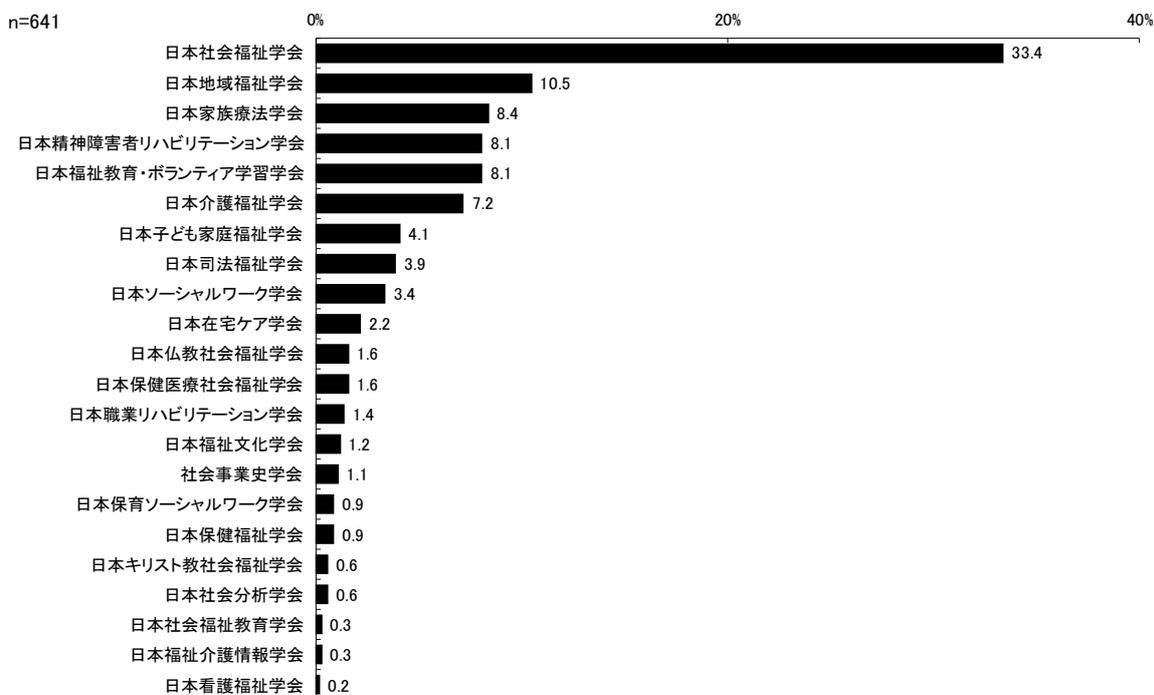
□ Q1-2. 社会福祉系学会連合は、次の 22 の学会から構成されています。下記の選択肢の中から、あなたが会員となっている学会をすべて選んでください。



(3) 社会福祉系学会連合のメイン学会

「日本社会福祉学会」(33.4%)が最も高く、次いで「日本地域福祉学会」(10.5%)、「日本家族療法学会」(8.4%)の順になっています。

□ Q1-3. 後続の(1)-(3)で、あなた自身がメイン学会として位置付けている学会について、全国大会への参加や発表について尋ねます。あなた自身のメイン学会を以下の中から一つ選んでください。



(4) その他の学会加入状況

□ Q1-4. あなたが会員となっている学会で、Q1-2 以外の学会の名称を、全て記入してください。

その他	件数
日本保育学会	17
日本心理臨床学会	16
日本老年社会科学学会	16
日本子ども虐待防止学会	14
日本精神保健福祉学会	14
日本公衆衛生学会	12
日本認知症ケア学会	12
日本ケアマネジメント学会	11
福祉社会学会	11
社会政策学会	10
日本精神神経学会	10
貧困研究会	10
日本看護科学学会	9
日本社会学会	9
日本心理学会	9
日本介護福祉教育学会	8

その他	件数
日本犯罪社会学会	8
日本学校ソーシャルワーク学会	7
障害学会	6
日本アルコール関連問題学会	6
日本精神保健福祉士学会	6
日本保育者養成教育学会	6
老年社会科学学会	6
介護福祉教育学会	5
日本介護学会	5
日本高齢者虐待防止学会	5
日本社会福祉士会	5
日本心理劇学会	5
日本精神保健看護学会	5
日本特殊教育学会	5
日本福祉心理学会	5
	など

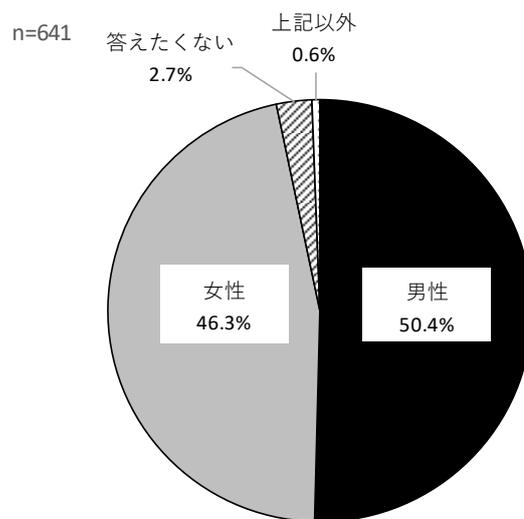
2 基本属性

基本属性について、以下の質問にお答えください。

(1) 性別

「男性」(50.4%)が最も高く、次いで「女性」(46.3%)、「答えたくない」(2.7%)の順になっています。

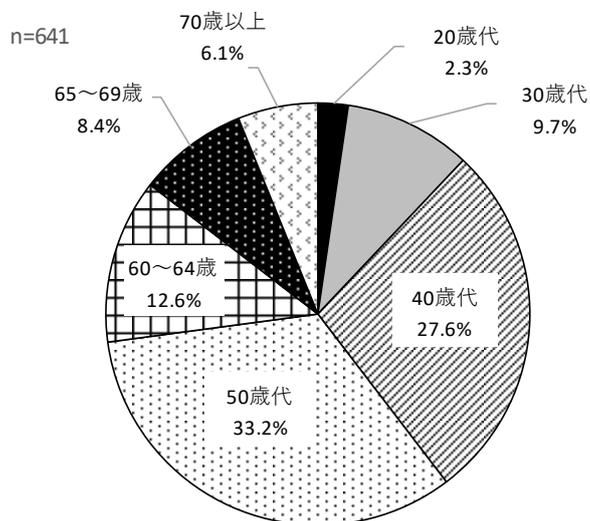
□ Q2-1. 性別をお答えください。(一つ選択)



(2) 年齢

「50歳代」(33.2%)が最も高く、次いで「40歳代」(27.6%)、「60～64歳」(12.6%)の順になっています。

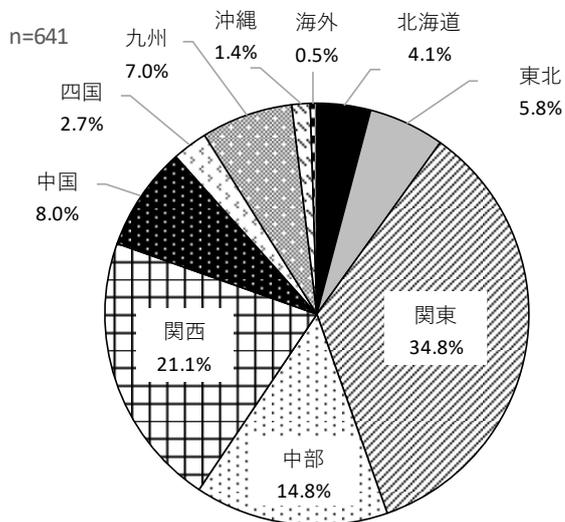
□ Q2-2. 年齢(2024年2月1日時点)をお答えください。(一つ選択)



(3) お住まいの地域

「関東」(34.8%)が最も高く、次いで「関西」(21.1%)、「中部」(14.8%)の順になっています。

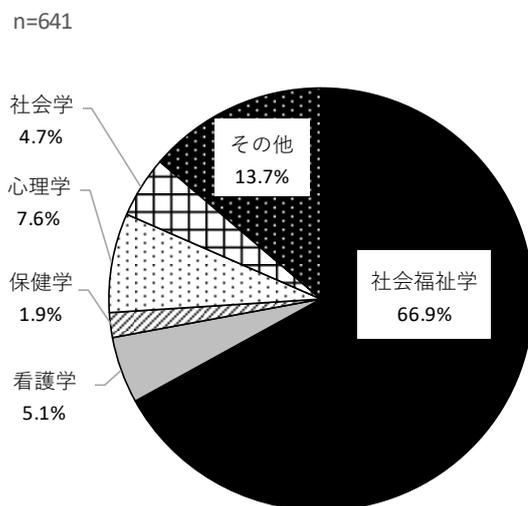
□ Q2-3. お住まいの地域(複数ある場合は、最も研究の拠点としている地域一つ)をお答えください。(一つ選択)



(4) 中心にしている領域

「社会福祉学」(66.9%)が最も高く、次いで「心理学」(7.6%)、「看護学」(5.1%)の順になっています。

□ Q2-4. 中心にしている領域(複数ある場合は、最も中心にしている領域)をお答えください。(一つ選択)



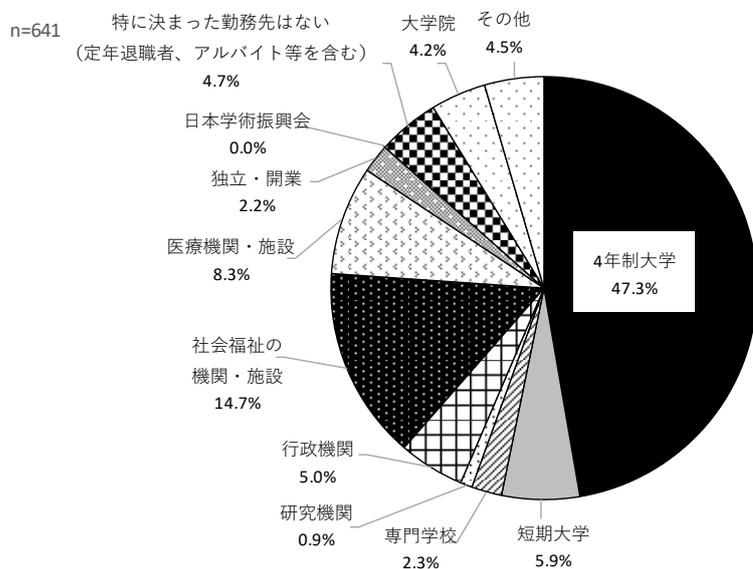
その他	件数
教育学	13
保育学	11
介護福祉学	9
医学	6
作業療法学	4
精神医学	4
法学	3
リハビリテーション学	2
職業リハビリテーション学	2
キャリア論	1
ケアマネジメント学	1
スポーツ科学	1
ボランティア	1
音楽	1
家政学	1
介護学	1
介護福祉薬学	1
学校・社会教育学	1
刑事政策	1
公衆衛生学	1
更生保護	1

その他	件数
高齢領域の音楽療法	1
国際関係	1
司法	1
児童福祉、教育	1
自然災害学	1
社会政策	1
社会保障法学	1
障害者雇用・就労	1
精神保健	1
精神保健福祉学	1
地域福祉	1
哲学	1
特別支援教育	1
日本語教育	1
乳幼児教育学	1
非営利経営	1
仏教学	1
保健福祉学	1
法律学	1
理学療法学	1
老年学	1

(5) 現在勤務している組織

「4年制大学」(47.3%)が最も高く、次いで「社会福祉の機関・施設」(14.7%)、「医療機関・施設」(8.3%)の順になっています。

□ Q2-5. 現在勤務している組織の種類(複数ある場合は、最も中心となる組織一つ)をお答えください。(一つ選択)

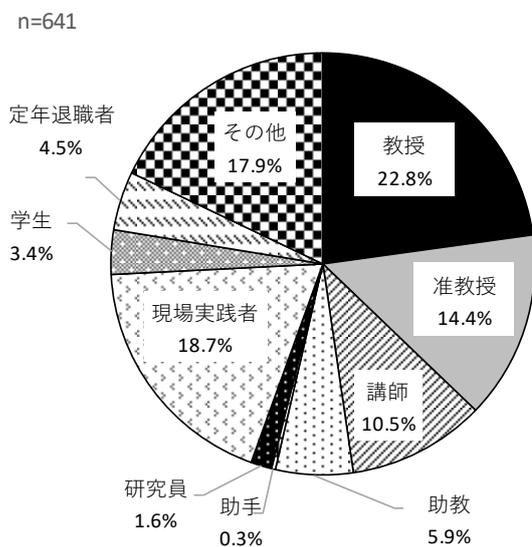


その他	件数
NPO法人	3
一般社団法人	2
高等学校	2
特別支援学校	2
民間企業	2
EAPプロバイダ	1
営利企業	1
学校	1
学生	1
企業	1
居宅介護支援事業所	1
教育委員会	1
公立中学校	1
高等専修学校	1
裁判所	1
児童デイサービス	1
精神科病院	1
大学の別科	1
独立型社会福祉士	1
犯罪被害者支援団体	1
福祉系事業所	1
法人	1
本宮市民生児童委員協議会	1

(6) 勤務先における立場

「教授」(22.8%)が最も高く、次いで「現場実践者」(18.7%)、「准教授」(14.4%)の順になっています。

□ Q2-6. 前問で選んだ勤務先における現在の立場(複数ある場合は、最も中心となる立場一つ)をお答えください。(一つ選択)



その他	件数
非常勤講師	8
理事長	8
管理職	6
職員	4
相談員	4
ソーシャルワーカー	3
教諭	3
経営者	3
施設長	3
事務職員	3
専任教員	3
代表取締役	3
院長	2
課長	2
客員教授	2
係長	2
社協職員	2
所長	2
代表理事	2
非常勤	2
サービス管理責任者	1
シニアアドバイザー	1
スクールカウンセラー	1

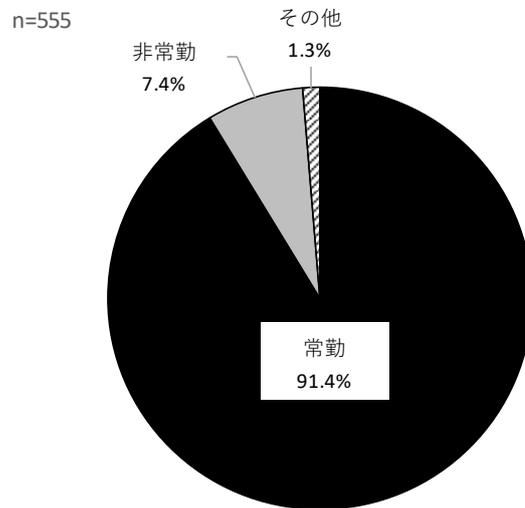
その他	件数
スクールソーシャルワーカー	1
センター長	1
チームリーダー	1
なし	1
フリーランス	1
マネジメント管理	1
マネージャー	1
リサーチアシスタント	1
医師	1
一般職	1
介護士	1
会社員	1
会社代表	1
現場経営管理	1
個人事業主	1
顧問	1
校長	1
行政官	1
再任用(主査)	1
司書	1
事業主	1
事業所管理者	1
事務	1

その他	件数
事務官	1
事務局員	1
事務局次長	1
事務局長	1
社会福祉行政担当者	1
社会福祉職	1
主任	1
主任介護支援専門員	1
取締役	1
取締役・顧問医	1
専任教員(職位なし)	1
専任職員	1
相談支援専門員	1
総合管理職	1
団体職員	1
特任准教授	1
非常勤職員	1
副主任	1
法人代表/現場実践者	1
民生委員児童委員並びに児童福祉部長	1
役職者	1
有償ボランティア	1

(7) 勤務形態

「常勤」が91.4%、一方で「非常勤」が7.4%となっています。

□ Q2-7. 勤務形態をお答えください。(一つ選択)

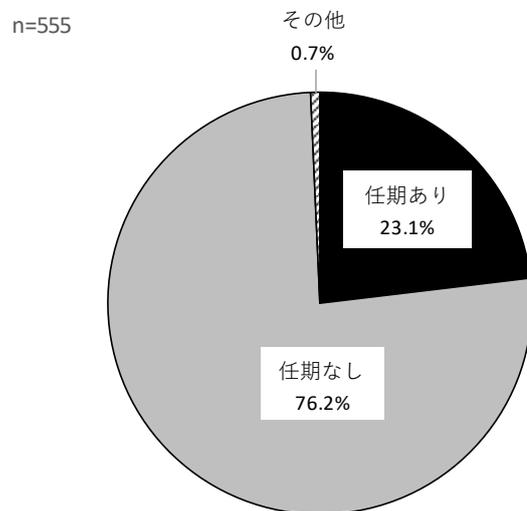


その他	件数
再任用	2
フリーランス	1
業務受託	1
個人事業	1
主任研究員	1
無給	1

(8) 任期の有無

「任期あり」が23.1%、一方で「任期なし」が76.2%となっています。

□ Q2-8. 任期の有無をお答えください。(一つ選択)

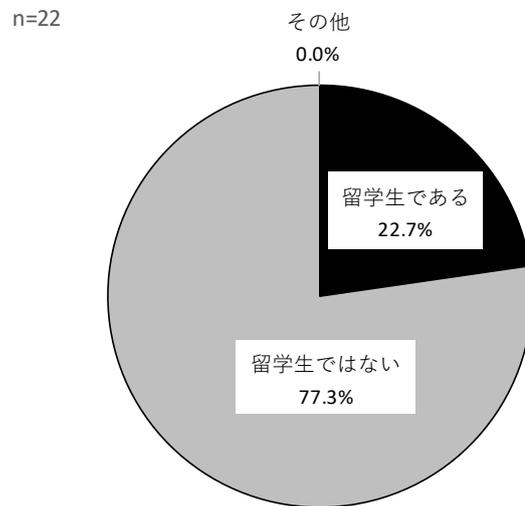


その他	件数
一年更新	1
定年	1
その他	2

(9) 学生のうちの留学生の割合

「留学生である」が22.7%、一方で「留学生ではない」が77.3%となっています。

□ Q2-9. 留学生か否かをお答えください。(一つ選択)



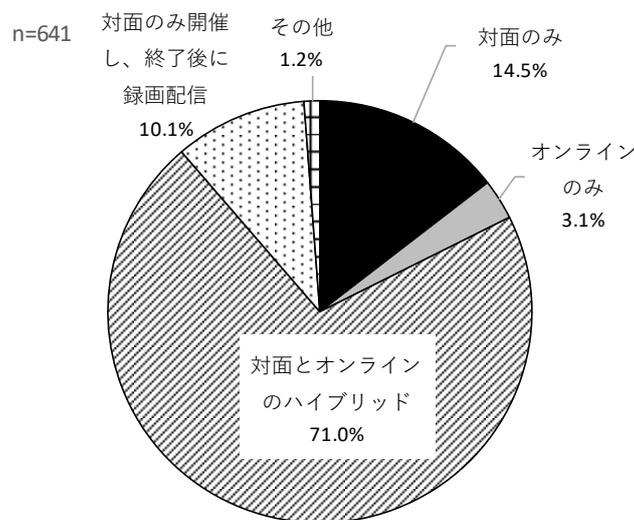
3 学会全国大会への参加に関する状況

学会全国大会への参加に関して、以下の質問にお答えください。

(1) メイン学会の全国大会参加の開催方法

「対面とオンラインのハイブリッド」(71.0%)が最も高く、次いで「対面のみ」(14.5%)、「対面のみ開催し、終了後に録画配信」(10.1%)の順になっています。

□ Q3-1. あなた自身がメイン学会として位置付けている学会の全国大会への参加の開催方法として、下記の選択肢の中から最も希望するもの一つを選んでください。

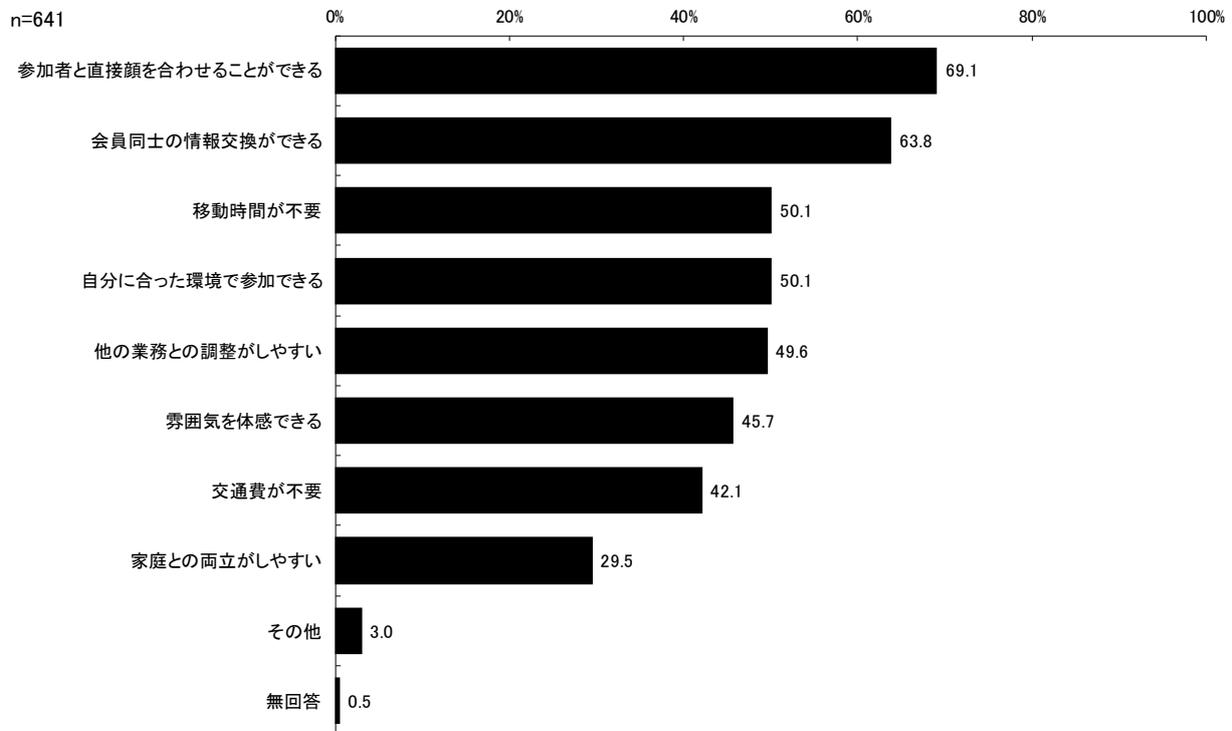


その他	件数
対面とオンラインのハイブリッド、終了後に録画配信	3
学会特集号に掲載	1
東京近辺開催であれば現地参加	1
参加希望なし	1
特になし	2

(2) メイン学会の全国大会参加の開催方法の選択理由

「参加者と直接顔を合わせることができる」(69.1%)が最も高く、次いで「会員同士の情報交換ができる」(63.8%)、「移動時間が不要」(50.1%)の順になっています。

□ Q3-2. 前問(メイン学会全国大会の開催方法)の選択理由として、あてはまるもの全てにチェックをしてください。



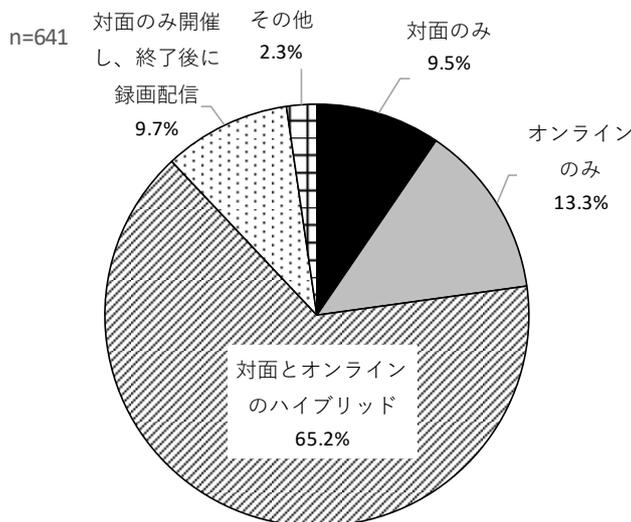
	全体	参加者と直接顔を合わせることができる	会員同士の情報交換ができる	雰囲気を感じることができる	交通費が不要	移動時間が不要	家庭との両立がしやすい	他の業務との調整がしやすい	自分に合った環境で参加できる	その他	無回答
全体	641	443	409	293	270	321	189	318	321	19	3
	100.0	69.1	63.8	45.7	42.1	50.1	29.5	49.6	50.1	3.0	0.5
メイン学会の参加方法全国大会へ	対面のみ	93	84	79	64	-	-	-	1	7	2
		100.0	90.3	84.9	68.8	-	-	-	1.1	7.5	2.2
	オンラインのみ	20	-	-	1	15	17	8	9	14	2
		100.0	-	-	5.0	75.0	85.0	40.0	45.0	70.0	10.0
	対面とオンラインのハイブリッド	455	303	279	189	240	288	166	279	265	7
		100.0	66.6	61.3	41.5	52.7	63.3	36.5	61.3	58.2	1.5
対面のみ開催し、終了後に録画配信	65	52	47	36	14	15	13	28	33	6	
	100.0	80.0	72.3	55.4	21.5	23.1	20.0	43.1	50.8	9.2	
その他	8	4	4	3	1	1	2	1	2	2	
	100.0	50.0	50.0	37.5	12.5	12.5	25.0	12.5	25.0	25.0	

その他	件数	その他	件数
時間や場所の制約がないため	5	質疑応答がスムーズに進む	1
感染防止が図れる	2	他の研究者と交流がとれる	1
日程が合わなくても視聴できる	2	対面の大会には参加しなかった	1
オンデマンドでいつでも見れると結局見なくなる	1	同じ時間に行われるセッションを両方聴きたいと思った時に便利	1
学会の開催方法に従って	1	旅行のきっかけになる	1
繰り返し視聴することができる	1	臨床心理士資格更新のためのポイントが取得できる	1
参加希望なし	1		

(3) メイン以外の学会の全国大会参加の開催方法

「対面とオンラインのハイブリッド」(65.2%)が最も高く、次いで「オンラインのみ」(13.3%)、「対面のみ開催し、終了後に録画配信」(9.7%)の順になっています。

□ Q3-3. あなた自身がメインには位置付けていない学会の全国大会への参加の開催方法として、下記の選択肢の中から最も希望するものを一つ選んでください。

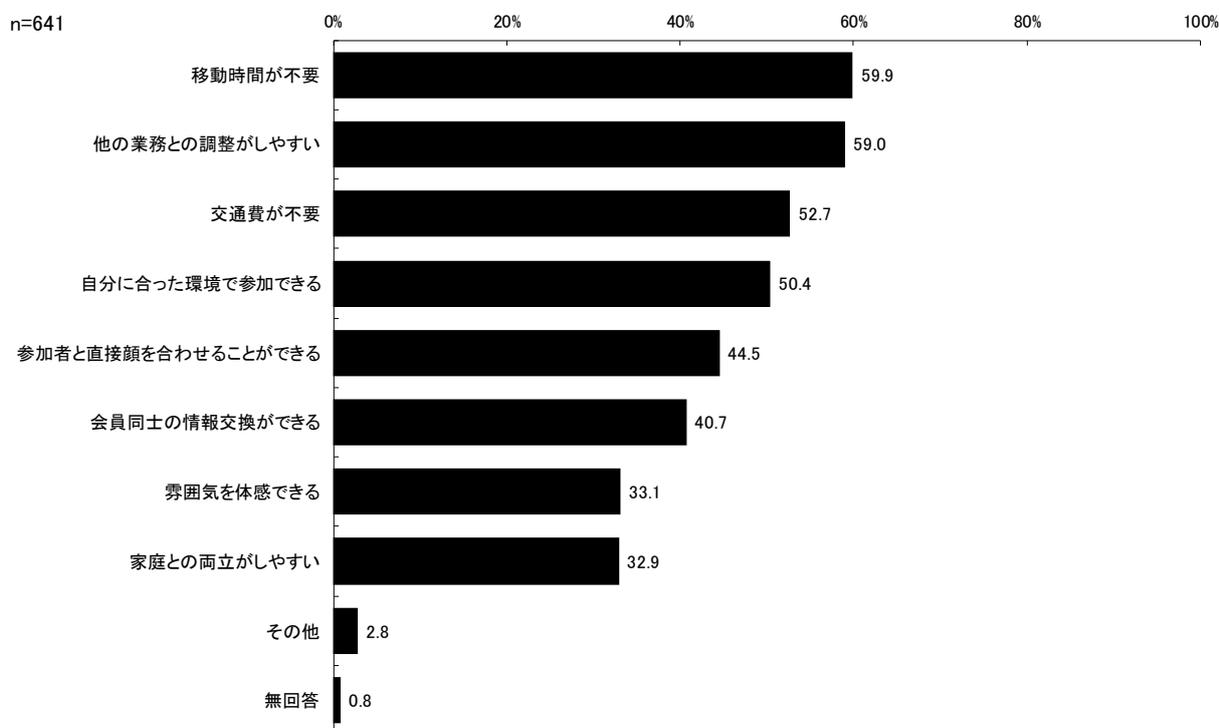


その他	件数
その他の学会には入会していない	6
学会誌の購読	1
学会特集号に掲載	1
参加希望なし	1
対面とオンラインにハイブリッド、終了後に録画配信	1
開催方法にはこだわらない	1
特になし	3
その他	1

(4) メイン以外の学会の全国大会参加の開催方法の選択理由

「移動時間が不要」(59.9%)が最も高く、次いで「他の業務との調整がしやすい」(59.0%)、「交通費が不要」(52.7%)の順になっています。

□ Q3-4. 前問(メイン以外の学会全国大会の開催方法)の選択理由として、あてはまるもの全てにチェックをしてください。



	全体	参加者と直接顔を合わせることができる	会員同士の情報交換ができる	雰囲気を体感できる	交通費が不要	移動時間が不要	家庭との両立がしやすい	他の業務との調整がしやすい	自分に合った環境で参加できる	その他	無回答	
全体	641	285	261	212	338	384	211	378	323	18	5	
	100.0	44.5	40.7	33.1	52.7	59.9	32.9	59.0	50.4	2.8	0.8	
メイン大会へは参加しない学会の全	対面のみ	61	47	34	34	4	3	1	3	9	1	-
		100.0	77.0	55.7	55.7	6.6	4.9	1.6	4.9	14.8	1.6	-
	オンラインのみ	85	2	7	6	62	70	33	54	47	2	-
		100.0	2.4	8.2	7.1	72.9	82.4	38.8	63.5	55.3	2.4	-
	対面とオンラインのハイブリッド	418	209	193	150	245	285	158	279	226	4	2
	100.0	50.0	46.2	35.9	58.6	68.2	37.8	66.7	54.1	1.0	0.5	
対面のみ開催し、終了後に録画配信	62	26	26	20	25	24	18	39	39	3	-	
	100.0	41.9	41.9	32.3	40.3	38.7	29.0	62.9	62.9	4.8	-	
その他	15	1	1	2	2	2	1	3	2	8	3	
	100.0	6.7	6.7	13.3	13.3	13.3	6.7	20.0	13.3	53.3	20.0	

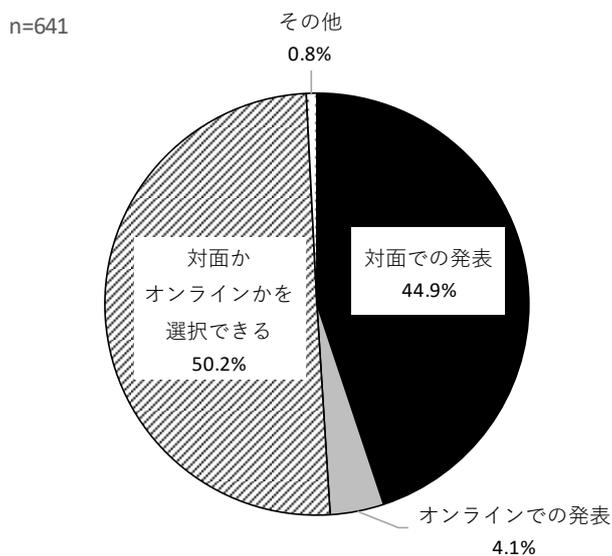
その他	件数
その他の学会には入会していない	2
24時間利用可能	1
メインの学会かどうかで選択できる	1
メイン以外の学会であればオンラインの方が楽	1
外出の機会を得られる	1
感染防止が図れる	1
研究動向が把握できる	1
参加希望なし	1

その他	件数
質疑応答がスムーズに進むため	1
体調不良があっても参加しやすい	1
対面に縛られる必要がない	1
内容がチェックできれば良いため	1
参加者と顔を合わせる必要がない	1
特になし	3
その他	1

(5) メイン学会の全国大会参加の発表方法

「対面かオンラインかを選択できる」(50.2%)が最も高く、次いで「対面での発表」(44.9%)、「オンラインでの発表」(4.1%)の順になっています。

□ Q3-5. あなた自身がメイン学会として位置付けている学会全国大会での発表方法として、下記の選択肢の中から最も希望するものを一つ選んでください。



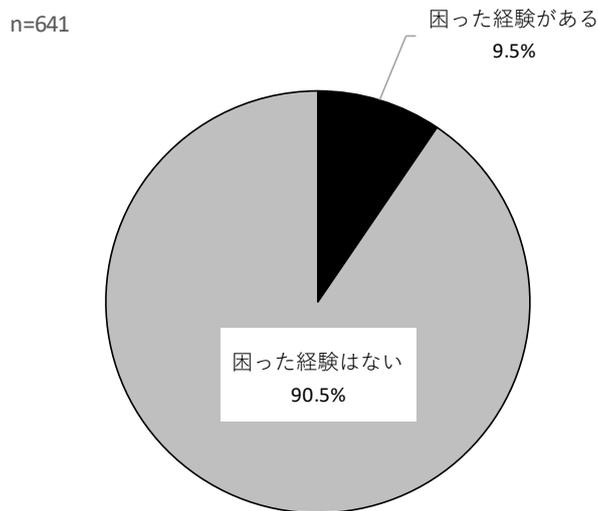
その他	件数
参加希望なし	3
その学会に合わせる	1
学会特集号に記載	1

4 学会全国大会における倫理審査規定

(1) 倫理審査規定への対応に困った経験の有無

「困った経験がある」が9.5%、一方で「困った経験はない」が90.5%となっています。

- Q4. 全国大会で発表をする際、倫理審査に関する規定への対応に困った経験はありますか。困った経験があれば、具体的内容を教えてください。



困った経験の具体的内容	件数
倫理審査を依頼できる先がない・わからない	14
倫理審査が厳しすぎる	7
研究や事例によっては審査を経ることが難しい	7
倫理委員会を通過していないと発表ができない	6
判断基準が不明瞭	4
発表方法や資料に制限があった	3
倫理審査に関するノウハウ不足	3
倫理審査の手順が煩雑、時間がかかる	3
対象者や関係者の了解が得られない	3
不本意な指摘や要求が発生した	3
何をどこまで記載すべきかが明確でない場合がある	2
倫理審査に関する規定はない・受けたことがない	2
倫理審査委員会が機能していない	2
その他	2

5 コロナ禍による経済面への影響

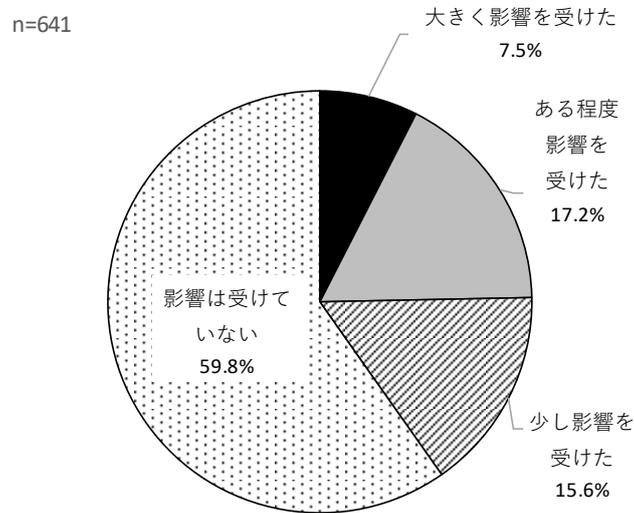
コロナ禍（※）による経済面への影響についてお答えください。

※この調査において、「コロナ禍」とは、2020年3月にWHOが新型コロナウイルス感染症のパンデミックと宣言して以降、感染症法の5類となった2023年5月8日までの間を指すものとしてお答えください。以降の設問でも、同様とします。

(1) 経済面への影響度

「大きく影響を受けた」、「ある程度影響を受けた」、「少し影響を受けた」と合わせて約40.0%となっています。一方で、「影響は受けていない」は約60.0%となっています。

□ Q5-1. 経済面への影響(例:収入の減少、経済的負担増など)がありましたか。



(2) 経済面への影響を受けた内容

- Q5-2. 経済面への影響を受けた具体的内容をお答えください。(例:在宅勤務となったがweb対応のための手当がなく困った、交通費が出なくなったなど)

経済面への影響を受けた具体的内容	件数
オンライン化による出費・整備の負担が発生した	42
収入・報酬・手当が減少した	40
仕事が減った、なくなった	24
感染症対策の対応	12
対面活動・行動が制限された	10
オンライン化以外の面でも出費・整備の負担が発生した	9
予算、必要経費が削減された	6
追加手当がなかった	3
精神的・身体的な負担が発生した	3
様々な変化に対応するのが困難だった	3
仕事が忙しくなった	2
組織・会社の収支が悪化した	2
出費が減った	2
特になし	3
その他	12

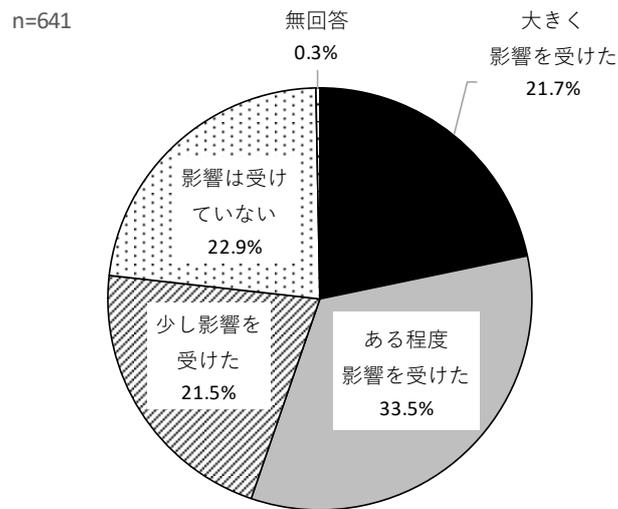
6 コロナ禍による生活への影響

コロナ禍による生活への影響についてお答えください。

(1) 生活への影響の有無

「大きく影響を受けた」、「ある程度影響を受けた」、「少し影響を受けた」と合わせて約 77.0%となっています。一方で、「影響は受けていない」は約 23.0%となっています。

□ Q6-1. 生活に影響(例:家族と会えなくなる、子どもの一斉休校等により仕事に行けなくなるなど)がありましたか。



(2) 生活への影響を受けた内容

□ Q6-2. 生活への影響を受けた具体的内容をお答えください。

生活への影響を受けた具体的内容	件数
家族や親戚、知人等の面会の制限	109
子どもの育児や家族の世話に負担が生じた	63
移動の制限・行動規制	57
コミュニケーション不足・交流の減少	37
感染対策に追われた	21
オンラインへの対応	17
自分や周りの感染による出勤停止や活動の制限	17
精神的・身体的に不調をきたした	13
在宅勤務への対応	12
仕事に影響をした	9
研究や調査活動等に支障が生じた	8
経済的損失	7
仕事量が増加した	7
その他	17

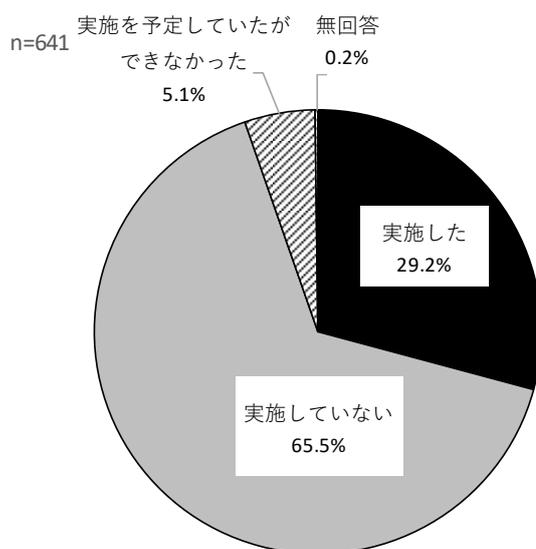
7 コロナ禍での研究活動

コロナ禍での研究活動についてお答えください。

(1-1) アンケート調査の実施有無

「実施していない」(65.5%)が最も高く、次いで「実施した」(29.2%)、「実施を予定していたができなかった」(5.1%)の順になっています。

□ Q7-1-1. コロナ禍でアンケート調査を行いましたか。

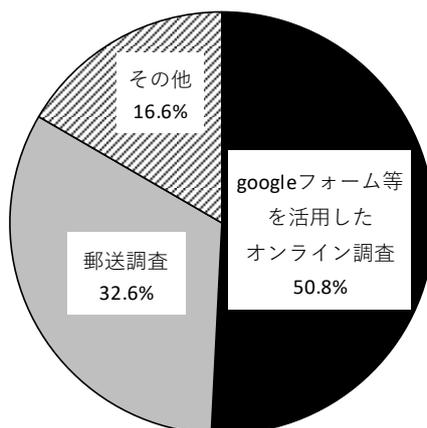


(1-2) アンケート調査の実施方法

「google フォーム等を活用したオンライン調査」が50.8%、「郵送調査」が32.6%となっています。

□ Q7-1-2. アンケート調査を実施した場合には、実施方法を教えてください。

n=187



その他	件数
オンライン調査と郵送調査の両方	7
対面調査	5
メール	3
調査委託会社に委託	2
web調査	1
オンライン調査、郵送調査と授業内	1
委託配票	1
会員アンケート調査	1
患者への直接アンケート調査	1
機関配布	1
記述式アンケート	1
質問紙とWEB調査の両方（対象者に選択してもらった）	1
職場にて直接記述を依頼した	1
電話・対面によるヒアリング	1
配布	1
病院内でアンケート調査	1
対面と留め置きを両方した調査	1
その他	1

(1-3) アンケート調査を実施できなかった際にとった対応

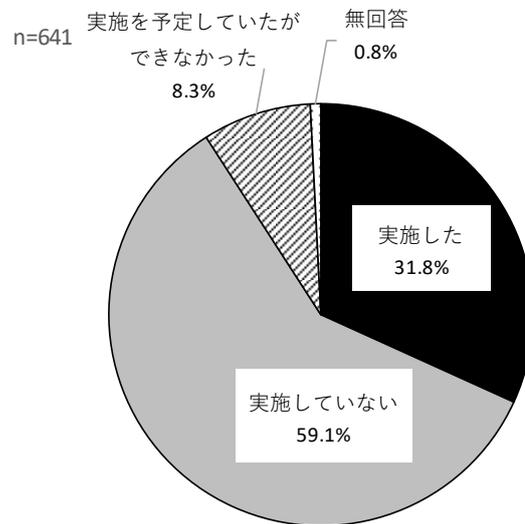
□ Q7-1-3.「実施を予定していたができなかった」を選択した人は、どのような対応をとったか、お答えください。(例:調査の延期、調査の中止、調査対象の変更など)

アンケート調査を実施できなかった際の対応	件数
調査の中止	12
調査の延期	11
調査の延期、中止	2
調査対象の変更	2
研究テーマの変更	1
調査の延期、調査方法の変更	1
調査対象の変更、延期	1
調査の延期、調査方法・対象の変更	1
その他	1

(2-1) インタビュー調査の実施有無

「実施していない」(59.1%)が最も高く、次いで「実施した」(31.8%)、「実施を予定していたができなかった」(8.3%)の順になっています。

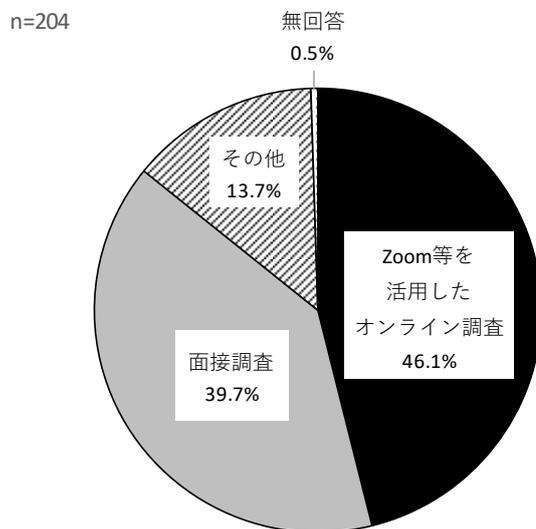
□ Q7-2-1. コロナ禍でインタビュー調査を行いましたか。



(2-2) インタビュー調査の実施方法

「Zoom等を活用したオンライン調査」が46.1%、「面接調査」が39.7%となっています。

□ Q7-2-2. インタビュー調査を実施した場合には、実施方法を教えてください。



その他	件数
オンライン調査と面接調査の両方	24
(患者・職員) 投書箱	1
参与観察	1
電話・対面	1
相手の了解が得られれば対面	1

(2-3) インタビュー調査を実施できなかった際にとった対応

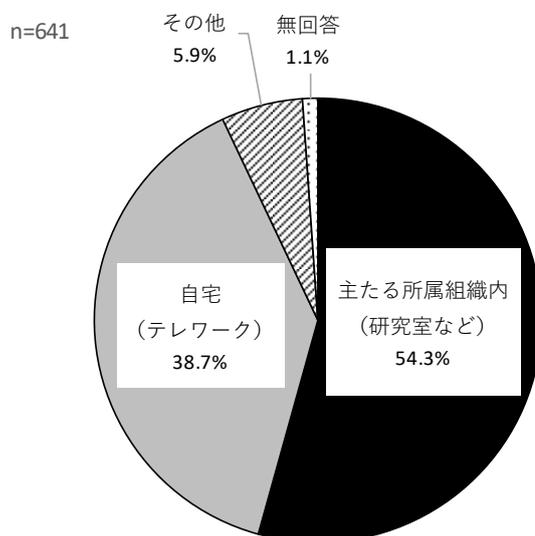
□ Q7-2-3.「実施を予定していたができなかった」を選択した人は、どのような対応をとったか、お答えください。(例:調査の延期、調査の中止、調査対象の変更など)

インタビュー調査を実施できなかった際の対応	件数
調査の延期	17
調査の中止	15
調査の延期、中止	6
オンラインでの実施、調査の延期	2
オンラインでの実施	1
オンラインでの実施、調査の中止	1
オンラインでの実施、調査の中止、対象者の変更	1
研究テーマの変更	1
調査の延期、調査対象の変更	1
調査の延期、調査方法の変更	1
調査期間の延長	1
調査対象の変更、調査内容の見直し	1
調査方法・対象の変更	1
調査方法の変更	1
その他	1

(3) 研究活動場所

「主たる所属組織内（研究室など）」が54.3%、「自宅（テレワーク）」が38.7%となっています。

□ Q7-3. コロナ禍での研究活動は、主にどこで行っていましたか。最も当てはまるものを一つ選んでください。

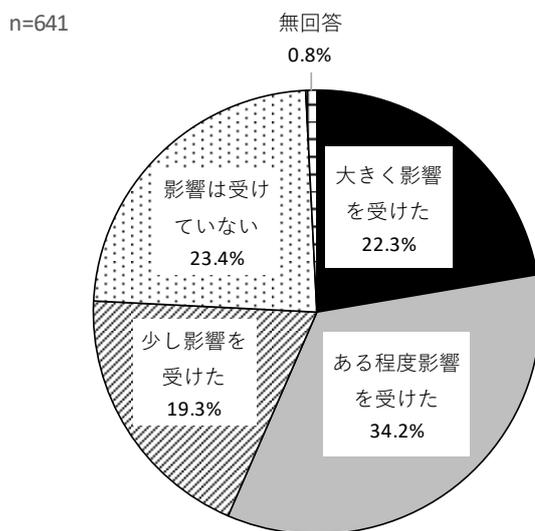


その他	件数
研究活動はしていない・できなかった	29
所属組織内と自宅	5
フィールド、拠点	3
学会	1

(4) 研究活動におけるコロナ禍の影響度

「大きく影響を受けた」、「ある程度影響を受けた」、「少し影響を受けた」と合わせて約 76.0%となっています。一方で、「影響は受けていない」は約 23.0%となっています。

□ Q7-4. 研究活動全般に関して、コロナ禍の影響をどの程度受けましたか。最も当てはまるものを一つ選んでください。



(5) 影響を受けた具体的な内容

□ Q7-5. 研究活動全般へのコロナ禍の影響を受けた具体的な内容をお答えください。

研究活動全般へのコロナ禍の影響	件数
対面機会の制限	64
移動の制限、公共施設等の利用制限	38
インタビュー調査の制限	36
研究・調査活動の中止	35
研究・調査活動の内容変更	24
フィールド調査の制限	23
調査実施や調査依頼に障害が生じた	22
海外での活動の制限	20
研究活動以外への対応	19
研究・調査活動の延期や遅延	16
オンライン授業への対応	15
訪問調査の制限	11
オンライン化が進んだ	6
学会活動の制限	5
情報交換やデータ収集が制限された	5
感染対策による負担	3
特になし	2
その他	33

(6) パンデミックが起きた際の停滞を防ぐ支援

□ Q7-6. 研究活動全般へのコロナ禍の影響を受けた具体的内容をお答えください。

パンデミック発生時に研究活動の停滞を防ぐ支援	件数
オンラインの活用に関する支援等	129
研究に対する柔軟なサポート	28
金銭的支援・資金援助	18
感染対策・医療支援	18
正確な情報伝達	16
人員体制の整備	5
育児支援	3
停滞は防げない	10
特になし、わからない	40
その他	44

8 コロナ禍を経た学会活動に関する課題

(1) 学会活動に関する課題内容

Q8. コロナ禍を経て、学会活動に関して課題になっていることを教えてください。

コロナ禍を経た学会活動の課題	件数
オンラインの活性化やハイブリッド開催の継続	65
対面活動・情報交換の減少	55
オンライン化による負担・問題	32
参加意欲の減少・研究活動等のモチベーションの低下	21
会員の減少、ネットワークの縮小	13
大会・学会等の運営に関して	10
対面開催や遠方開催が負担に感じる	9
一部の研究活動や調査が難しくなった	9
停滞していた研究活動の挽回	7
感染リスクの警戒意識	6
経済的支援	4
特になし、わからない	89
その他	35

9 社会福祉連合もしくは各学会による研究支援

(1) 研究支援に関する希望内容

□ Q9. 社会福祉系学会連合もしくは各学会による研究支援に関して、希望があれば教えてください。

社会福祉系学会連合ならびに各学会に求める研究支援	件数
研究助成の支援	17
オンラインの活用	15
若手研究者への支援拡大	12
学会を超えた幅広い活動・交流の場	12
研究支援	11
研究の指導・サポート	11
各学会のオープンな情報提供・活用	11
研究倫理審査に関する支援	9
対面形式の開催の推奨	7
実践研究の支援	6
学会の在り方の改善	4
育児支援	3
特になし、わからない	114
その他	28

Ⅲ 自由記述

□ Q2-4. 中心にしている領域(複数ある場合は、最も中心にしている領域)をお答えください。(一つ選択)

自由記述内容
キャリア論
ケアマネジメント学
スポーツ科学
ボランティア
リハビリテーション学
医学
医学 精神医学
音楽
家政学
介護学
介護福祉学
介護福祉薬学
学校・社会教育学
教育
教育学
教育学 社会教育学

自由記述内容
刑事政策
公衆衛生学
更生保護
高齢領域の音楽療法
国際関係
作業療法
作業療法学
司法
児童福祉、教育
自然災害学
社会政策
社会保障法学
障害者雇用・就労
職業リハビリテーション
職業リハビリテーション学
精神医学

自由記述内容
精神保健
精神保健福祉学
地域福祉
哲学
特別支援教育
日本語教育
乳幼児教育学
非営利経営
仏教学
保育
保育学
保健福祉学
法学
法律学
理学療法学
老年学

□ Q2-5. 現在勤務している組織の種類(複数ある場合は、最も中心となる組織一つ)をお答えください。(一つ選択)

自由記述内容
EAPプロバイダ
NPO
N P O
NPO法人
一般社団法人
一般社団法人代表理事として、子どもの居場所活動に従事
営利企業
学校
学生
企業
居宅介護支援事業所
教育委員会
公立中学校
高等学校
高等専修学校
裁判所
児童デイサービス
精神科病院
大学の別科
特別支援学校
特別支援学校教員
独立型社会福祉士
犯罪被害者支援団体
福祉系事業所
法人
本宮市民生児童委員協議会
民間企業

□ Q2-6. 前問で選んだ勤務先における現在の立場(複数ある場合は、最も中心となる立場一つ)をお答えください。(一つ選択)

自由記述内容
SW
サービス管理責任者
シニアアドバイザー
スクールカウンセラー
スクールソーシャルワーカー
センター長
ソーシャルワーカー
チームリーダー
なし
フリーランス
マネジメント管理
マネージャー
リサーチアシスタント
医師
一般職
院長
課長
介護士
会社員
会社代表
管理者
管理職
客員教授
教諭
係長
経営者
現場経営管理
個人事業主
顧問
校長
行政官
再任用(主査)
司書
施設長
事業主
事業所管理者
事務官

自由記述内容
事務局員
事務局次長
事務局長
事務職員
社会福祉行政担当者
社会福祉職
社協職員
主任
主任介護支援専門員
取締役
取締役・顧問医
所長
職員
専任教員
専任教員(職位なし)
専任職員
相談員
相談支援専門員
総合管理職
代表
代表者
代表取締役
代表理事
団体職員
特任准教授
非常勤
非常勤講師
非常勤職員
副主任
法人代表/現場実践者
民生委員児童委員並びに児童福祉部長
役職者
有償ボランティア
理事
理事長
理事長、校長
事務

□ Q2-7. 勤務形態をお答えください。(一つ選択)

自由記述内容
フリーランス
業務受託
個人事業
再任用
再任用の正規職員
主任研究員
無給

□ Q2-8. 任期の有無をお答えください。(一つ選択)

自由記述内容
一年更新
勤務先就業規則にもとづく定年と任期ありの区別がわからない
大学教員ではありません
定年

□ Q3-1. あなた自身がメイン学会として位置付けている学会の全国大会への参加の開催方法として、下記の選択肢の中から最も希望するもの一つを選んでください。

自由記述内容
学会特集号に掲載
希望はございません
研究活動をしていないので、参加意欲なく会費のみの支払いです
対面、オンライン、終了後録画配信
対面とオンラインのハイブリッド、終了後に録画配信
対面とオンラインのハイブリッドで開催し、終了後に録画配信
東京近辺開催であれば現地参加
特に考えたことはない

□ Q3-2. 前問(メイン学会全国大会の開催方法)の選択理由として、あてはまるもの全てにチェックをしてください。

自由記述内容
24時間利用可能
オンデマンドでいつでも見れると結局業務にかまけて見ない
開催地が地方の場合はオンラインがよいから
学会の開催方法に従って
学術的にきちんとディスカッションするのであれば、対面は必須。対面なら、特に、前後や周囲の発表への意見や質問などができるが、オンラインだと自分の発表のみ、かつ他の研究者との交流がなく、一方通行となってしまう。。
感染症対策の心配がない
感染防止が図れる

自由記述内容
基本的に会場に行きたいが、行けない場合は当日参加したいセッションに参加できないこともあるので、ハイブリッド、オンデマンドは参加意欲が上がる
繰り返し視聴することができる
今は参加希望なしです。
参加決断の自由度が高い
質疑応答がスムーズに進むため。
体調不良があっても参加しやすい
対面の大会には参加しなかった
地方での学会開催の場合、宿泊費もかかるため、ハイブリッドとの併用が便利
同じ時間に行われるセッションを両方聴きたいと思った時に便利。
日程が合わなくてもプログラムを視聴できることが大切だから
旅行のきっかけになる
臨床心理士資格更新のためのポイントが取得できる

□ Q3-3. あなた自身がメインには位置付けていない学会の全国大会への参加の開催方法として、下記の選択肢の中から最も希望するものを一つ選んでください。

自由記述内容
1学会のみに加入
その他学会なし
なし
メインの学会しか参加していない
加入なし
開催方法にはこだわらない。
学会誌の購読
学会特集号に掲載
今は参加希望なしです
参加していない
他の学会への加入なし。
対面とオンラインにハイブリッド、終了後に録画配信
特になし
特に考えたことはない
日程

□ Q3-4. 前問(メイン以外の学会全国大会の開催方法)の選択理由として、あてはまるもの全てにチェックをしてください。

自由記述内容
1学会のみに加入
24時間利用可能
オフラインで開催の場合も発表してすぐ帰るだけだし、オンラインならもっと楽。ただ、じゃあメリットの大きいオンラインのみを求めるか、というと、自分のメイン学会がオンラインになると困るの逆で、メイン以外に「オンラインのみ」を求めるのは変だと思う。
その学会がメインの人にとっては、対面がいいと思います。
その他学会なし
なし
外出の機会を得られる
学会参加もオンラインが当然になってきている昨今、わざわざ対面に縛られる必要はないと感じている
感染防止が図れる
研究動向が把握できる
今は参加希望なしです。
参加者と顔を合わせることができない
質疑応答がスムーズに進むため。
先ほどと同じ
体調不良があっても参加しやすい
特になし
内容がチェックできれば良いので

□ Q3-5. あなた自身がメイン学会として位置付けている学会全国大会での発表方法として、下記の選択肢の中から最も希望するものを一つ選んでください。

自由記述内容
その学会に合わせます
学会特集号に記載
今は参加希望なしです。
発表は考えてない
発表経験なし

□ Q4. 全国大会で発表をする際、倫理審査に関する規定への対応に困った経験はありますか。困った経験があれば、具体的内容を教えてください。

自由記述内容
SNS上の資料が使えず、発表ができなかった
こまかい
ズーム配信だと事例報告が漏れ聞こえてしまう可能性があり、事例を出せずに実践報告を実施した。
どこに通せばよいか
どこまで記載しなければならないのか、制限字数との兼ね合いで迷う
ヒトを対象としていない研究であっても、倫理委員会の審査結果を求められる時には、倫理委員会を通過していないというだけで研究発表に制限が発生する
医学系をベースに作られており厳しすぎる
育児の関係で断念した
学会倫理審査の必須のチェックリストの内容が、発表内容と会わずチェックできない項目があった
学術学会なのに、研究の倫理的な問題を独自に評価しないで、一概に倫理審査を受けていないものは受付しないというスタンスがおかしい
学内倫理審査の承認を得るために時間がかかる
規定に対応できず報告できなかったことがある
規定の文言を一言一句入れる必要があった。困ったというより驚いた。
勤務先に倫理規定がない
研究機関に在籍していない時は、倫理審査を受けることができない
研究対象施設や人へ文書でやり取りを行う際に、相手が警戒する感じがする。
厳しすぎる
誤解に基づく指摘があった
行政施策の実践報告で倫理審査を求められること
査読者による判断の差が大きい
細か過ぎる 特に発表に関して（国際学会の感覚と全く違う）
自治体を対象とした調査の場合の扱いが不明瞭だったこと
所属の倫理審査が厳しい（他学問領域からの審査）
所属機関における研究倫理審査委員会が社会科学系の研究倫理基準を備えていないこと。
所属先に倫理審査が受けられない場合の対応
所属先の倫理審査機関は審査までに時間がかかり、スムーズにいかない（数か月かかる場合もある）。
所属組織に倫理審査委員会がない
職場には該当する倫理委員会が存在しない
職場に倫理委員会がなかった
職場外で行った研究に関する倫理委員会をどこで開いてもらうか
申し込み時にはない表記を要求される。発表原稿の無駄なチェックがある。
人が対象ではなかったので倫理審査をうけていない
対象者の同意が取れない場合がある（退職例、困難事例など）
対象者の了解がとれない（行方がわからない）
大学の倫理審査が厳しすぎる。理系中心の観点で審査されがち。

自由記述内容
大学を定年退職しているので、倫理審査をどこに依頼すればよいのか迷う
大学等に所属していないため、職場に倫理委員会がなく、倫理審査が受けられない。
大規模な質問紙調査なのに、対象となる地域名を伏せる必要があった
調査での関係者の了解がとれない
調査について倫理審査を必ず受けることが発表の条件とされているが、私がかつともベースにしている学問分野や研究フィールドではそのような習慣がないため、報告できないことがあった（そもそも倫理審査の弊害が指摘されており否定的に捉えられることすらあるのに、画一的に審査を受けた形式を求められ困っている）。
調査対象が倫理審査になじまない
定型的な記載で良い学会は問題ないのですが、見本を見て何を記載すべきかが明確でない場合に困ったことがあります。
適当な倫理審査委員会がない
発表時点で所属大学の研究倫理委員会が立ち上がっておらず、査読結果にて委員会の承認を受けているかについて指摘されたこと
発表内容が倫理審査の対象になるかどうかいつも不安である
複数の質的・量的調査を同時に行った場合の成果報告を複数に分けざるを得ないが、「サラミ」出版（報告）に抵触するかしないかの判断が不明瞭
訪問看護では本来利用者が医療機関に属していると、考えると医療機関と、所属で倫理委員会の承認を得なければならないのかと悩む
本務校がないので、倫理審査委員会に諮りづらい
倫理委員会が、機能していない
倫理委員会が職場にないので、外部に依頼すること
倫理審査が求められる前に、学術誌への投稿の同意を研究協力者から得たものなどを投稿してよいか判断に迷う。
倫理審査が研究計画書への指摘になり、通過しないため取り下げ、学会発表できない
倫理審査についての学びの機会がなかった
倫理審査の手順が煩雑で、時間がかかる。
倫理審査の提出が前提である
倫理審査を経していない研究は、たとえ成果が出ても発表できない
倫理審査委員会が設置されていない所属機関であり、自身の順守だけで大丈夫か不安が残る。
倫理審査委員会にかけていない研究がある
倫理審査委員会のノウハウの蓄積不足
倫理審査受審の判断基準のばらつき
臨床事例の扱いについて、倫理審査を経ることが難しいことがある

□ Q5-2. 経済面への影響を受けた具体的内容をお答えください。(例:在宅勤務となったがweb対応のための手当がなく困った、交通費が出なくなったなど)

自由記述内容
PCウェブ環境整備への投資（周辺機器等）
WEB 授業等の対応に使用するツールをそろえること
webで実施するための環境整備のため設備・備品を整えなくてはならなかった
webに要する費用がかさんだ
Webの環境に戸惑った
webの環境を整えるために費用がかかった
WEB環境の整備
Web環境は自費である
w e b環境を整えるための機材などの費用
WEB関係機器の購入
web機器をそろえる必要があったが、手当は出なかった
Web対応ができるように必要物品の購入が急遽必要となった
web対応が多く関係機材への支出
w e b対応が多く手当てがなく困った
WEB対応について出費がかさんだ
Web対応に関する諸経費を個人負担した
Web対応に関わるソフト購入などの費用
web対応のための環境づくりで自己負担が生じた、学外で依頼されていた業務が中止になったりして収入が減った
Web対応のための環境整備
web対応のための機器をそろえた
WEB対応のための機材等の整備
web対応のための手当てがなかった
WEB対応の機器の支払い
web対応の整備など経費がかかった
web対応の費用が自腹だった
web対応費用
Zoomでの会議や授業のために、機材や家具を購入した。公共交通機関の利用を諦め自家用車通勤に切り替えたため、大学構内の駐車場登録ができなかった初年度は駐車場代がかかった。
アルバイトが減った
ウェブ対応のための役務が増えたが、報酬が減少した
オンラインでの講義の準備、対応に手間がかかったがその分の手当等がなかった。
オンラインにより、食費、電気代がかさんだ
オンラインのため交通費支給がなかった
オンラインの研修が多くなったが手当がない
オンライン環境整備のための出費
オンライン授業のための道具や資料等の購入など
オンライン対応関連の機材購入など

自由記述内容

コロナにかかったり、濃厚接触者になった時欠勤扱いになり、減給した
コロナのクラスターの発生などで所属機関の運営に影響があり、そのために所属機関の収支に影響があった。そのため若干だが、収入が減った。
コロナ禍で自宅からオンラインは出費が減った
コロナ禍を機に転職（大学から地元の専門学校へ）し、収入が激減した。
コロナ対策の経費が全て職場から出るわけではない。常勤以外の収入が減った。
サービス残業の増加
データ収集のためフィールドに入れいない
メンタルヘルスに不調をきたし、休職することになった
やり方が変わりいろいろ支出の仕方が変化したので
よくわからない降格を行われた
リモートのための機材の購入等
リモートワークを推奨されるが、家庭でできる環境でなく、改めてパソコン等の環境を充実させる費用がかかった。
を希望します
委託事業費の実費分について削減があった
移動手段が変わり交通費が増えた
医療コスト（検査キット等）の負担が増加
医療機関に勤めており、感染対策の費用がかかった
一部の仕事がなくなった
一部は職場補助あり。複数の出席は研究費もしくは持ち出し。
飲み会等の外食などの出費が減った。
運営する子ども食堂で、テイクアウトの希望が増えたのに対処するため、台所を3倍に拡張し、多額のリフォーム工事費がかかった。
衛生用品の購入費用や検査費用の負担
家族の収入が減った
会社も用意してくれたが、感染対策や自分自身で用意する物品の購入費用がかかった。今も継続している。
外部研修の仕事が減った
外部講師の機会が減少した
各種手当が削られた
各種手当の減少。
各対応によって違いがあった。
学会参加のための交通費が捻出しにくくなった
学会参加経費がなくなった
学会費の負担
学生数減少
活動がなくなり、収入が減った。また、在宅勤務となって、交通費も支給されなくなった。
感染症対策、職員の給与補償、患者数の減少、等により収支が悪化した。
感染症対策のための費用、家族の収入の減少
感染対策のための費用がかさんだ

自由記述内容
感染対策の費用が莫大にかかった
感染予防のための商品の購入費
感染予防関連の支出がかなり多くなった
環境構築のための経費増
機器導入の費用がかかった
給与が減額された、講演・研修講師の依頼が減り減収となった
勤務時間の縮小
勤務先での勤務形態や事務処理量が激変して、身体的負担も精神的負担もとんでもなく増えました。
勤務先の財政赤字により賞与減少
研究費の削減
研修依頼がキャンセルになる事があった。
研究会や講演会が実施されなくなったため収入が減少した。
研修講師がなくなった
研修講師の仕事が減った
現場のフォローに奔走していた
個人的ではなく、組織としての収入減があった
交通費
交通費がでなくなった
交通費が支給されない、在宅勤務の環境を整える費用がかかったが自腹である
交通費が出ない
交通費が出なくなった
交通費支給無し
講演、研修講師の依頼の減少による収入減
講演が減った
講演や現場でのコンサルが無くなった。
講演を中心に活動をしているが、依頼数が大きく減少した。
講義が減った
講師の回数が減った
講師等の依頼が減った。
妻の仕事復帰のタイミングが遅くなり、貯金を切り崩すことが多かった。
在宅・職場におけるオンライン授業・会議に係るIT環境整備に費用を要した。
在宅で勤務する際に必要な機材を購入し、環境を整え維持する必要が発生した。
在宅勤務が増えた
在宅勤務となり、オンラインによる通信費、自宅の電気代（電気代高騰も含む）などが全て自費として支出が増えたため。
在宅勤務に対する通信費の補助がなかった
在宅勤務のためのPC系機材の購入が必要だった
在宅勤務の為、諸手当が減給となった

自由記述内容

在宅勤務や物価高による経済的負担増

仕事がなくなった

仕事柄、マスクや消毒関係の持ち物の実費負担が増加した

事業所全体の訪問看護件数の減少

自家用車を使用する経費がかかった

自身がり患し働けなくなった

自宅でzoomをするために、新たな自己負担コストが発生した。

社会活動が制限された

社会活動をするについて検査キット費用を自己負担した。

主人の講師の仕事や講演依頼が無くなった

手当がなくなった

授業はオンラインなのに会議は対面で行うため出勤が必須であった。臨機応変な対応がなく困った。

収入が下がった。

収入が減った

収入の減少

就職活動をひかえたので無職期間があった

集会行事（講演など）の減により謝金収入が減った。

出張がなくなり、報酬額が減少した

出張が難しくなった。

所得減

諸経費諸々の値上がり

賞与が削減された

情報の入所のために何回もアクセスすることが必要になった。

職場で異動があり学会費の補助がなくなった

食費

対面での研修等の業務が減ったため

対面で行っていた仕事ができなくなりその分の収入が0になった。在宅勤務となったが特に手当がなく、通信費や光熱費、備品費に費用を要した。

対面の研修が減った

対面開催予定の業務が中止になったり規模が縮小されたりして、収入が減った。コロナだけが原因ではないが、財政難を理由に謝金が減額されたものもあった。

対面企画が中止となった

対面業務をアピールしづらく、休業状態だった。

対面型の研修会等が無くなった

対面研修の激減

大学院生なのでアルバイト先の勤務が減った

調査研究が行えなかったため大学院博士課程の学費が増えた

通所系事業の収入減少により賞与が減少

通信機器の準備

自由記述内容
通信機器や備品の購入
通信機器代、通信費は自己負担
通信費が自己負担となった
転居とコロナにより実践現場を失った。
特になし
特になし
特に影響は受けていない。むしろオンライン化が進み参加しやすくなり、無料で学べる機会が増えた
日常生活の費用が増えた
入園や登園を控える家庭が増えた
入学者減により賞与が減少した
売り上げが下がったことを理由に俸給が減額となった。
非常勤の仕事がなくなった
非常勤の授業について、コロナの影響で閉講となり収入が減った。
必要な予算が無くなった。
病棟閉鎖（ロックダウン）、入退院転棟制限、検温当番
物価上昇により出費が増え、大学は定員割れでボーナスが減った。
保育者養成校なので実習がとても大変で学生たちも大変だった。学生の経済的な問題。オンラインの授業には限界を感じた。特に対人関係の実習や授業には大きな影響があった。
本務校以外の仕事の制約があったため
務めるはずだった研修会などの講師の予定が中止となるが多かった。
面接が困難になった。
利用者の減少、生産活動の売上減少にともない法人収入が減り、賞与などで調整を余儀なくされている
旅費上限が厳しくなった

□ Q6-2. 生活への影響を受けた具体的内容をお答えください。

自由記述内容
?恒例の両親に長期間会うことができなかった。②高齢の義理の母に会うことができないまま、他界した。③知人・友人・研究仲間等と長期間交流できなかった。
①子どもが小学校入学直後に休校、幼稚園に転園直後に休園となり、妻の仕事復帰のタイミングが計れなかった。②出勤者数を制限するために、変則的な出勤体制となったため、生活リズムを維持することが大変だった。
いろいろとな意味で地域に出る、コミュニティ参画等の機会が激減した。
ウェブ授業準備の心身負担
オンデマンドの教材準備、文献・史料への制約など
オンラインの対応に始めは慣れず、時間をとられた。
オンラインへの体制作りにも多大な労力が必要だった
オンライン授業が多くなり、勤務時間が若干変わった。
オンライン授業をしたことはなかったが、初めてオンライン授業を受講する約600名の学生の受講環境を整えるためのリーダーとなり、昼夜を問わず、オンラインで学生対応にあたり、左右の手の腱鞘炎、腰痛、視力の著しい低下で、生活にも支障が出た。
オンライン授業を求められた。
オンライン住宅事情によりオンライン対応時にお互い家族は声を潜めて過ごさざるおえなかった
お酒を飲む機会がなくなった、在宅勤務が可能となった
クラスター対策に追われた
こどもが家にいた
こどもの学校休校
コミュニケーション不足による様々な齟齬
コミュニケーションがとりにくい
コロナウイルス以外の疾病で入院中の家族と会えなく、心理的なサポートができず、辛い思いをさせた。結果的に病状が悪化し、家族を亡くすことになった。今でも、そのことを思い出すとやりきれないものがある。
コロナにかかった人との面会、家族の見取り・葬儀
コロナに罹患し、出勤停止となったり、子どもが罹患し、濃厚接触者としてたために休むことになった。
コロナ感染した子どもの監護に伴う出勤停止が増えた
コロナ期間中、家族が闘病のため入院した。当初は重篤な状態が続いたが、面会等がほぼできなかった。
コロナ対応で残業が増加
コロナ陽性となり10日間自宅待機仕事に支障をきたした
ストレス
ストレスの増大
テレワークの実施
ひとと接することを避けた
ホームステイ、ソーシャルディスタンス、親しい関係者との関わり謝絶と悪化
マスクの常時着用 有症状の相談が出来なかった
マスク常用生活や外出・対面の減少、外食の減少など。
メンタルヘルスに不調をきたし、退職したため家族に心配をかけた。
リモートワークへの切り替えが大変だった
異動が多くなった

自由記述内容

移動が難しいため学会への参加が減ったことと離れて暮らす家族と過ごす時間が減ったこと
移動が必要な業務が全て止まった
移動が不便
移動に関する配慮を要した
移動の制限
移動の制限、交流の制限、市場の停滞、
移動の制限があった
医療系大学のため感染対策が厳しい
医療者に準じた行動制限
一人で活動することが多かった
一斉にオンライン授業になり、居住スペースを工夫する必要があるがあった
一斉休校により、子どもの面倒を見たり、勉強を教えたりする時間が非常に多くなった。
遠距離介護が難しくなった
遠方にいる家族になかなか会えなかった
遠方に住む家族や友人などと会えなかった
遠方に住む親のケアに行けなかった
遠方の家族に会いにくくなった
遠方の帰省がしにくい
遠方の親が亡くなる前に面会に行くことができなかった。
遠方の親戚との交流
遠方の親族に会いに行けない、家族旅行ができない、
遠方家族との面会
家事が増えた
家族、知人、友人との交流が減った
家族、同僚との付き合い方、勤務状況の変化
家族・知人友人と会いにくくなった
家族が、病気でも帰省を制約された。
家族がコロナに感染し、仕事を休まなければならなくなった。
家族がコロナ感染し、濃厚接触者となり出勤できなくなった
家族がコロナ感染により仕事を休まざるをえなくなった
家族からの感染
家族が感染していないか、自分が家族を感染させるのではないかと、という不安が常につきまとして離れません。
家族が在宅してケアをしなければならない
家族が罹患した際に、就業できなくなった。
家族が罹患して、自宅待機になった。
家族が罹患し家に帰れなくなった
家族と2年間会えなかった
家族といる時間が増えたため、心理的に負担になった

自由記述内容

家族との接触が減ったことと、職員の家族の感染による勤務調整で休みにくい状況が生まれた

家族との面会が自由にできなくなった。

家族と会えない

家族と会えなくなった

家族と会えなくなる

家族と仕事の調整

家族と自由に会えなくなった、家族が発熱すると出勤停止になるなど仕事に影響があった

家族と普通に会えなくなった

家族に会いにくくなった

家族に会えない

家族に会えなくなった

家族に障害者がいる

家族の通っている 障害福祉サービスが中止になったことで負担感は増した

家族の入院中の面会

家族の病気療養へのケア提供が必要となった

家族の閉じこもり フレイル

家族への面会制限

家族へもコロナへの対応や用心をする必要があった

家族や友人との交流が激減した

家族生活

家族全体の生活に様々な影響を受けた。

家族入院中に面会ができなかった

家族－老親等－に気軽に会えなくなった。

介護が必要な家族と会いづらくなる

介護と授業準備の両立など

海外や遠方に住む家族と会えなかった

外出が減りストレスが溜まった

外出しなくなり人との関係が切れた

外出しにくかった

外出しにくくなったこと

外出しにくく買い物が不便

外出に対する抵抗感

外出の自粛

外出は制限され、不便なところが多く、計画を作る際にも自由度が減ってしまう。

外出を極端に控えなければならなかった

外出機会の減少

外出制限

外出頻度が大きく減少した

自由記述内容
外食ができなくなり友人との交流などの機会が減った
外食や会合、会議、面談など
外食や社会的活動への参加自粛など
外食や買い物など
外部調査に出かけられなくなった。職場の感染症対策に苦労した。
各種集会への参加が滞った
学会、研修会への参加が難しいことがあった。
学校が休みになり、仕事に行けなくなった
学校に行かなければならなくなったときには困った
学校の休校
学校や幼稚園が休園となり自宅で面倒を見る日が多かった
学生への教育・指導がやや困難になりました。一方、良い影響として仕事と家庭の両立はしやすくなった面もありました。
学生対応が増え、会議の時間が伸び、帰宅時間が遅くなることもある、
感染などで仕事を休まないといけないこと
感染の後遺症が長引いた
感染の心配
感染への配慮
感染リスク
感染リスクから生活行動が制限された
感染を避けるため活動制限があった
感染対策ため、費用が莫大にかかった
感染対策のために両親への面会ができなかった
感染予防のため、行動が制限された。
感染予防のため、配信授業用の動画作りで、不規則な食事、睡眠不足などになった。
感染予防対策を含めた、日々の生活の緊張感
慣れないオンライン授業の準備、学生対応に時間を要し、長時間座ったままで心身に不調を来した。
基本的人権としての行動の自由等の制限を受けた また家族の入院jなどでは面会で制限があった
帰省、入院中の親族の面会制限
帰省ができない、人込みを避けた生活
帰省ができなかった
帰省ができなくなった。
帰省できない
帰省できなくなった。
帰省できなくなった。家族の見舞いに行きにくくなった。
帰省など、移動に対する支障が生じた。
帰省など、以前よりもしづらくなった。
帰省などの移動、対面での研修ができない

自由記述内容
帰省に躊躇した
帰省の回数が減った。
帰省や移動に制限があった
帰省禁止
気分転換の活動の制限
義父が病院に受け入れてもらえず亡くなった
教育機関のため、親子別居生活をした
教育方法新規構築のための業務過多
狭い自宅にてオンラインで相談をする際に家族に聞かれない環境にするために、自分も家族も物理的に大変苦労した。
勤務形態の大幅な変化、施設入所している家族と会えない等
緊急事態宣言時の出勤停止 職場への感染持ち込みのないよう、自宅内外で常に緊張下にあったことなど
経済的に厳しくなったと考える
経済的損失
健康管理
研究のためにフィールドワークに行けない
研究を進めることに大きな支障があった
研修業務が減り、収入が減った。
県外にいる家族に会えなくなった
県外に帰省できなかった
県外への出張が原則できなかった
県外移動ができない
原則として直行直帰で勤務、ゴーグル・マスク着用、消毒・三密回避
公共交通に代えてすべてを乗用車にした。
公共施設等の閉館（休館）、入場制限などで資料収集が滞ったり、仕事や生活とバランスがとれなくなることが（たまに）あった。
攻撃的な日との集団ができた
行動の仕方が変わった
行動の制限を受けた事
行動規制 集団へ参加できない
行動制限
行動制限（遠出ができない等）を受けた
講義方法が変更され、準備のためにプライベートの時間を削った
高齢の一人暮らしの親族の買い物などの代行
高齢の家族、親戚の介護や葬式に行かねばならなかったが際に行けなくなった。
高齢の家族との面会を控えるなど
高齢の家族と会いづらかった。
高齢の家族や重要なイベントを控えている知人と会うことができなかった
高齢の親との隔離生活

自由記述内容
高齢の両親、親戚に会う機会が少なくなった
国内外出張やスタディツアーが困難となった
催事への参加制限
在学中だったため、学生生活と就職活動等に影響を受けた
在宅ワークと育児の両立の難しさ
在宅勤務が主の時期があり、家族への負担増
在宅勤務が認められたので、通勤時間が0となった。
在宅勤務だったが、子どもも休校となり日中は仕事はほぼできなかった。
在宅勤務となった
在宅勤務になり、生活リズムが変化した
在宅勤務による生活状況への変化、影響
在宅時間が増えた。
三密の回避、移動制限、他者との接触回避
仕事がますます忙しくなった。
仕事が激務になった。仲間との連帯感もあり、人間不信もあり人生を見直す機会を得た忘れられない期間です。
仕事が減った。
仕事に影響が出ないような生活をしていた。
仕事のリモート化、会議のオンライン化、社会的活動の縮小、家族と会う回数の減少、外食や運動の機会の減少など
仕事の仕方が変わり、続けることができなくなった
仕事の調整が難しい
仕事の方法、内容においてオンラインでの会議や研修等が増えた。
仕事場に行けなくなった
仕事柄生活を大きく制限された
仕事面での制限、子どもの学校園等の利用制限
仕事量の増加と子どもの休校により生活時間の調整が困難となった
子どもがインターネット依存になり希死念慮が出て通院や学校との調整、子どもとの関わりの日常的な苦勞が増えた
子どもがオンライン授業になり、私自身もオンライン授業やオンデマンド対応が必要となり、回線が不安定になったり、時間をずらして夜中に録画するなど非常に大変な生活状況であった
子どもが引きこもりがちになり、集団生活ができなくなった。
子どもが家にいてその対応に追われたこと
子どもが家にいるようになった。外出ができにくくなった。
子どもが家にいる時間が長くなり、仕事ができない
子どもが家にいる対応
子どもが学校に行けなかったため仕事ができなかった
子どもが学校に行けなくなり、仕事へ支障が出た
子どもが在宅（休園期間）かつ仕事も在宅で、仕事が進まず、子どもも親もストレス下であった。
子どもが常に家にいるので昼食の用意が必要となった
子どもが生まれたので、仕事との両立に困った

自由記述内容
子どもたちの面倒をみながら仕事をするの大変さ
子どもと会う頻度が減った
子どもの学校、習い事の中止
子どもの学校が休みになり在宅する必要があった
子どもの学校関連でオンライン対応が必要
子どもの学習環境が整備されないままオンライン授業が行われるようになった
子どもの学生寮の停止
子どもの休校により、仕事を制限した。
子どもの休校に伴い、自宅学習のフォローに時間をとられた。また、子どもの精神的なケアも必要になり、業務より優先せざるを得ない状況になった。
子どもの休校への対応
子どもの自宅待機となり出勤できないなど
子どもの通う学校・園での感染拡大と、それに伴う急な休業
子どもの通う保育園の休校や登園自粛要請による欠勤
子どもの発熱で子どもを含む家族全員が感染していないことが確認できるまで出勤できなかった。
子どもの病気や通院などに制限がかかったことがあった
子どもの保育園が一時休園になった
子どもの療養にともなう業務の休止
子どもも在宅での講義受講になり、webを使う部屋の調整が大変
子どもや家族が感染した場合、仕事に行けない
子どもを見てもらえない
子どもを保育園に預けられない期間があり、在宅で仕事をせざるを得なかった
子の学校や保育園の停止にともなって、親も出勤できなくなった期間がある
子の休校などで仕事に影響が出た。外出できずリフレッシュや他者との交流が出来なかった。
子供の休講
子供の面倒が増えた。所属法人の収入減少。
施設での義母への面会制限
施設での面会ができなくなった
自粛強化による他者交流の減少
自身のり患により日常生活を送るのが難しくなった
自身の大学院進学時の授業実施方法
自宅での家事が増えた
自分や家族の外出の制限
自由に移動できなくなった。オンラインでの買い物が増えた。
自由に外出できなくなった
実家で生活する高齢の母に会いに行くことができなかった。
実家に帰れない
実家に帰省できない

自由記述内容
実家に帰省できなかった、コロナ対応のため業務多忙となり過労状態だった
実家の親に会えなくなった
実家への帰省がしにくかった為、要介護状態の両親の状態が適宜確認できず不安だった
実家への帰省ができなかった、余暇としての旅行や会食を控えた
実習で出入りする高齢者施設の規定で、帰省やレジャーの予定を制限された
実習等で高齢者施設を訪問することが多く、行動制限等、外出を自粛した。
社会生活への不自由と制限のある日常及び差別感
社会的交流、接点が抑制された
社会的交流の機会が減った。
収入
収入が減った
収入の減少。
収入減
出勤形態
出産後の社会復帰であったが、テレワークや夫の在宅勤務により、家庭と仕事の両立がしやすくなった。子どもが小さいと学会に行けないが、オンラインで参加出来るため子育て期間中でも学会に参加させてもらえるようになった。
小学校が一斉休講となり、授業準備・研究が滞った。
少しでも子供の体調に変化があると、登校・登園ができず家でみるため、育児負担が増えた。
職場との別の地域にある自宅に戻れなくなった
親の介護
親の介護が難しくなった
親の入所施設の面会が困難であった
親戚、友人と会えなかった
親族が亡くなったが、確認できないまま火葬された
親族でも会えない。外出の制限。
親族との交流の減少
親族との必要な往来が制約・遠慮された
親族と会いづらくなった、高齢の親を買い物に連れていく際に空いている時間を選ぶなど生活に影響があった
親族などとの交流
人とのリアルな付き合いが制限された
人との交流が制限された
人との出会いが減った
人との接触を避ける必要があった
人と会いづらくなった
人と会う時間が大幅に減った
人と会えないことがあった。
生活場所の変化
生活必需品の不足

自由記述内容

全般的に受けないことは不可能です

組織内でのコミュニケーション不活性

早期は完全オンラインになり、子どもの学校も休校／オンラインになったことで、仕事と子どもの世話や支援の時間帯が重なって大変だった

相談者と会いにくい

息子たち家族と容易に会えなくなった。研修講師として対面が望ましいのだがオンラインになったことでロールプレイなどできなくなった。

他県への移動ができず家族に会えなかった

他者（疾患を持つ親族、医療機関勤務の知人、学生らと直に会えなくなった。

他者とのコミュニケーションの機会が減った

他者との交流ができない

他者との交流は著しく減った

他者との情報共有が難しくなった。

他府県の大学院に進学していたが、対面授業がほとんどなかった。そのため、研究に関する情報共有や交換。親睦を深められなかった。

体調への不安感

体調を崩した

体調不良への対応、マスク生活、海外に行くことができない

対象者の眼前でのセッションができない音楽療法ができない苦しい期間であった。

対人関係が大きく失われた

対面での懇親会が減少した

対面での報告

対面の活動が感染が広がる度、出来なくなる事もあった

対面の講義になれていたので対処に戸惑った

対面活動の縮小

対面交流の減少

対面交流の制限など

対面交流制限

対面授業が無いこと

大学のロックダウンで研究が滞った

大学の授業がオンラインとなり、システムに慣れるのに時間を要し、苦勞もした

大学院への通学が制限された

大学内の教務の仕事の負担が大きく、子育てとの両立が大変であった。

単身赴任でかつ行動制限のため帰省できない期間が長かった

単身赴任のため家族に会えない

知人との交流ができなくなった

地域での活動が減少（高齢者等が相手のため）

地域活動の休止を余儀なくされた。

地元へ帰ることが制限された（ため、転職した）。

自由記述内容
地方に住む高齢の親に会いに行けなかった。体が動くうちに旅行がしたいと言っていたが3年間どこにも連れて行くことができず、その間に足腰が弱ったり、認知症を発症したりして旅行もままならなくなってしまった。悔いが残る。
調査への出張ができないことがあった
調査研究の中断、支援活動の中断
直接人と会うことが困難だった。
通勤の問題
当時は現場におり、むしろ業務が多忙で、休暇などをとることが困難な時期があった。
当時は大学勤務で実習担当者だったため、厳しい感染管理を自分に強いていた。息抜きもなく責任も重く、もともと適当にできない性格のため追い詰められてしまい心身を壊し、結果的に昨年度退職して現場に戻った。
特に緊急事態宣言が出たときなど、ステイホームが自分にあわないのか、精神的に落ち込んだ。
特別養護老人ホームでの、親との面会など。
特例貸付の実施
日程調整
入院した家族との面会
入院した家族への面会制限
入院している家族の面会
入院者へのお見舞いが禁止された
入院中の家族に会えなくなった
入院中の家族に面会できなかったこと
入院中の家族への面会、県外の家族の帰省
入院中の親族に面会できない
入所中の母親への面会が不可能となった
年3回程度交流していた親族と会えなくなる、出産時立会や面会ができなかった、出産後入院が必要となったが面会ができず1ヶ月子どもと離れざるを得なかった
濃厚接触者としての業務の制限
濃厚接触者となった時の欠勤
濃厚接触者になり、仕事を休まざるを得なかった
濃厚接触者等の制度により行動が制限された
買い物や食事等の外出、旅行ができなくなった
発熱を伴う疾患で必ずコロナの検査を受けなければならず、非常に不便を感じた
非常勤で医療機関に出入りしているため、家族以外との会食、県外への不要不急の外出を控える等、行動や生活圏が制限された
病院への面会、休校による休み
病院勤めのため、移動や買い物等制限を設けられた。
不便
風邪症状に対する対応が厳しくなり、保育園にあずけづらくなった。
複数の子供が長期感染し、見守りや、回復後の学校への通学意欲の啓発支援。
物価高
別の地域との家族と交流困難。教育現場の混乱。相談援助専門分野や医療分野等における対人接触の困難さ。

自由記述内容
別居している親の介護
別居の親に会うのを控えることになった
別居中の母親への訪問ができなかった。
別々に食事をとったり、顔を合わせた会話が出来なくなり、家族関係が希薄になった。
保育園の休園により仕事に出られなかった
保育園の休園による仕事の調整
保育所が休園中のweb授業の際に子どもが映ってしまう
母の介護に多種の制約が出た
亡くなった親族の最期に会えなかった
殆ど休みがなかった。
夜間の研修活動が減少した
友人と会う機会が減った。
友人等との会食制限、施設に入所する親との面会制限、学会の対面方式の制限
予定していた冠婚葬祭が無くなったり延期したり、遠方ゆえに参加させてもらえなかったりした。親族との集まりも、遠方かつ首都圏在住・勤務、高齢者や子どもに関わったり医療福祉系の機関に出入りする状況だったために控えざるを得なかった。
要介護の親への面会が制限された
里帰りができず、実家の家族に会えなかった。
離れて住む親に会えない
旅行など外で余暇を過ごすことができなくなった
旅行や外食の機会が大幅に減りました
両親の介護（サービス利用、入院等）等制限され影響が大きかった。
老人ホームにいる親族との面会が長期間制限された。会えるようになる間に認知症が進み、残念だった。
在宅勤務があった

□ Q7-1-2. アンケート調査を実施した場合には、実施方法を教えてください。

自由記述内容	自由記述内容
(患者・職員) 満足度調査、職員メンタルヘルス調査	記述式アンケート
Googleフォームを利用したオンラインと郵送調査の併用	業者への依頼
web調査	質問紙とWEB調査の両方 (対象者に選択してもらった)
オンライン 郵送 授業内	職場にて直接記述を依頼した
オンライン、郵送、両方	対面
オンライン、郵送両方	対面と留め置きを2つを併用した調査
オンラインか郵送の選択式	対面によるアンケート
オンライン調査と郵送調査の併用	対面調査
ミックス	対面配布
メール	調査委託会社に委託した
メールによる送付・返送	電話・対面によるヒアリング。
委託配票	配布
会員アンケート調査	病院内でアンケート調査
患者への直接アンケート調査	両方行った
機関配布	

□ Q7-1-3. 「実施を予定していたができなかった」を選択した人は、どのような対応をとったか、お答えください。(例: 調査の延期、調査の中止、調査対象の変更など)

自由記述内容
ケアマネ事務所を経営していたが廃業した。
延期、オンラインへの変更、調査対象の変更
延期・中止を行った。
研究テーマの変更
全てをキャンセルし、再度調整した。
中止
調査の延期
調査の延期及び調査方法の変更
調査の延期後、中止
調査の中止
調査は中止になってしまった
調査を延期した
調査対象の変更
調査対象の変更・延期

□ Q7-2-2. インタビュー調査を実施した場合には、実施方法を教えてください。

自由記述内容
基本面接、一部zoom
(患者・職員) 投書箱
Zoomと対面、両方
ZOOMと面接の両方
zoomと面接調査の両方を行った。なお、面接はその時の感染拡大状況に応じて、変更した。
オンライン、対面いずれも実施
オンライン、面接の両方
オンラインと対面の両方
オンライン調査と面接調査
オンライン調査と面接調査の併用
オンライン調査と面接調査はどちらも行った
ミックス (併用)
希望によって面接・zoom両方
協力者の希望に合わせて、対面とzoomを選んでもらい実施した
参与観察
相手の了解が得られれば対面で
相手方の希望に合わせてどちらも選択できるようにした
対面、オンラインの両方
対面で実施し、希望者にはZoomで対応
対面とZoomの両方
調査対象の希望に応じて、オンラインと面接どちらも実施した。
電話・対面
面接調査とオンライン調査の両方
両方

□ Q7-2-3. 「実施を予定していたができなかった」を選択した人は、どのような対応をとったか、お答えください。(例: 調査の延期、調査の中止、調査対象の変更など)

自由記述内容
オンラインでの実施、調査の延期
オンラインで実施
オンラインの活用、調査の中止、調査対象の変更等
延期
延期・中止
感染を避けるため、対象者の了解が得られない
研究テーマの大幅な変更
多くの調査は中止し、一部可能な対象にはオンラインで実施した。
中止
調査の延期
調査の延期、対面実施予定をオンラインに変更
調査の延期、調査対象の変更も考慮
調査の延期。調査中止になった対象者もあり。
調査の延期または中止
調査の延期及び調査方法の変更
調査の中止
調査の中止 延期
調査の中止、延期
調査の中止及び延期
調査は中止になってしまった
調査を延期したが、対象施設を精神保健福祉施設（地域活動支援センター、就労継続支援B型事業所など）にしていたので、再開の目途が立たず、中止となった。
調査機関を延ばした。それでも予想よりも少ない人数しか調査できなかった。
調査対象の変更、調査内容の見直し
調査対象の変更、調査方法の変更
調査中止
調査方法の変更

□ Q7-3. コロナ禍での研究活動は、主にどこで行っていましたが、最も当てはまるものを一つ選んでください。

自由記述内容
(大学院生として) 共同研究室、自宅
オンライン授業などの業務に追われ研究はできなかった
コロナ渦中に所属が変わった(2022年春に変更)。前所属の場合は、完全テレワーク、現職では所属組織内。
コロナ対応で忙しく研究活動が出来なかった
していない
していません
学会
学生のオンライン授業受講のサポートが昼夜にわたり、研究活動を行える状況ではなかった。
活動していない
業務に追われ、全くできなかった
研究できなかった
研究というより、拠点における実践活動なので、感染予防策を取って実施していた。
研究に割く時間を捻出できなかった
研究はしていない
研究をしていない
研究活動ができていなかった
研究活動はしていない
研究活動はできませんでした(研究活動どころではありませんでした)
研究活動は実施できていない。
行っていない
自宅と研究室、半々くらい
自分が開拓したフィールドに調査を行った。
実践活動を続けた
出産、育児と重なり、研究はしていなかった
所属組織内と自宅
職場&自宅(テレワーク)
前述したが教務に時間をとられ研究活動が完全に停止した。そして結果的に研究職も失った。
停止状態
当時は研究職以外の仕事をしていた
特にしていない
特に研究活動は実施していない
特に研究活動をしていない。
本業が忙しくなり、できていない。

□ Q7-5. 研究活動全般へのコロナ禍の影響を受けた具体的内容をお答えください。

自由記述内容
?学会・研究会・調査など、あらゆる対面での研究活動がストップした。②学会・研究会はオンラインにて実施したが、十分な議論ができたようには思えない。③オンライン授業の準備等で、教育に費やす時間が増え、研究活動に十分な時間が取れなかった。
2020年ごろは対面で対象者にミニ講義を一定期間受けてもらい、事前と事後の変化を調べる実験的研究を進めていたが、感染リスク回避のため、また、先方の意向もあり、研究そのものを縮小せざるを得なかった。これ以降の自分の気持ちの変化はもちろん自己責任であるが、意欲が減退したのは事実である。最近、ようやく気持ちも立て直して、コロナ前の気持ちの水準にもどってきた。平穏な社会の重要性を痛感している。
6-(2)に記載
アンケート調査やインタビュー調査が難しくなった。
インタビューがWeb上となった
インタビューが実施しにくく、時期をずらした。大学の講義をオンラインに切り替えるための準備に時間がかかり、研究にあてる時間が一時期は減った。
インタビューによる研究が中止となった
インタビューや共同研究の打ち合わせがzoom利用となった
インタビューをビデオ通話で実施することとなった。
インタビューを含めた現地調査ができない
インタビューを受けてもらえなかった
インタビューを用いる調査を断念した
インタビュー時の感染予防対策
インタビュー対象者を探せなかった
インタビュー調査ができず、フィールドに行けない時期があったため、研究が進まなかった。
インタビュー調査が実施できなかった
インタビュー調査が滞った
インタビュー調査が難しくなった
インタビュー調査の参加者やコロナ陽性や濃厚接触者になり、インタビュースケジュールの調整を修正を行う必要があった
インタビュー調査や訪問調査を控えた
インタビュー調査等のフィールドワークができなくなった。
インタビュー等に配慮が必要になった。
インタビュー日程の変更があった
エスノグラフィーができなくなった
オンデマンドやオンライン授業準備のため研究時間の確保が難しくなった。
オンラインでのやり取りで、十分対話できなかった。
オンラインでの会議などに慣れるのが大変だった。その一方で、オンラインが普及したことで、遠方へ移動する時間、体力、費用が節約されて、とても助かった。
オンラインによるインタビューができない場合の調査対象の調整が難しかった。
オンライン会議が選択肢にできるようになった
オンライン開催の拡大で研修等への参加がしやすくなった
オンライン環境の整わない時期があった

自由記述内容
オンライン授業の準備
オンライン授業の負担が重く、研究どころではなかった。
オンライン授業やオンライン実習の企画・準備、オンラインでの会議の増加などにより、業務量が増加し、研究の時間が減少した
オンライン授業や学生対応に追われていた。オンライン会議で仕事がプライベートに食い込んできた。
オンライン授業作成の時間がとられた
オンライン対応講義内容・準備に多くの時間がかかった。
クラスター
クラスターが起こるとすべての治療活動が抑制される
コロナで被験者のリクルートが困難となった。
コロナへの対応で研究がほぼストップした
コロナ禍で忙しい対象者へ、調査依頼をしにくかった。
コロナ対応で苦勞されている現場に対する調査はできないと判断した
ズーム や Google などのツールの 習得が必要になった
ステイホーム中の精神面の落ち込みで、何も手につかなかった。
せっかく科研費をとったのに3年間研究が進まず、さらにうつになり退職した。現在は客員研究員として大学においてもらってはいるが、この間に研究計画を全部見直さざるを得なくなった。研究者として今後やっていける自信がない。
データはなかなか入手できなくて、鬱になってしまって、研究の作業は止まってしまった
データ収集に制限あり
ハイブリッド対応を含めた授業準備、会議等の資料作り
フィールドワークができなくなった。
フィールドワークが思うようにできなかった
フィールドワークではなく、オンラインでの手法に限られることになった。
フィールドワークの実施が困難となった
フィールドワークの制限
フィールドワークやインタビューの制限や縮小、他の方法への変更など
フィールドワークを避けた
フィールドワーク調査ができなかった
フィールド調査ができずに研究計画の全面改訂
フィールド調査ができなかった。遠慮した。地域の活動が止まってしまった。
より実績のあがる具体的活動に重きがおかれ、研究活動へは、積極的に関われなくなった
リモート指導となった
ワークショップ形式の話し合いを実施できなかった
移動ができなかった
移動が出来にくい
移動に支障が生じた。また、インタビューを断られることがあった。
移動制限
移動制限, 対面制限, 集合制限

自由記述内容

移動不可
医療機関への出入りが制限されたため、研究フィールド・対象者の確保が難しかった
印刷など制限があった
遠隔授業への対応で時間を割かれた
遠隔授業対応で、動画作成など資料作成にかなりの時間を要した。
遠方での講義、リモート活動の増加
遠方への調査などが制限された
家庭で長時間にわたり取り組む。夜遅くのzoom会議など
家庭訪問ができなくなり、来所での面接のみでは背景が読みづらくアセスメント不足で支援をしてしまう。
介護教育について対面授業を想定した研究を考えていたが、オンライン授業となり考えていた研究を実施できなかった。
介護現場との連携が難しくなった
介護福祉現場に行けない
介入研究を対面で行えずオンラインで行った
会議を開きにくくなった
会合が中止になった
海外でのインタビュー調査を予定していたが、コロナ禍で渡航が困難となり、オンライン・インタビューに切り替えた。この件も含め、研究全般に遅れが生じた。
海外での研究が行えなかった
海外での資料収集ができなかった
海外での調査活動ができなくなった。
海外での調査研究
海外の研究者の招聘が困難になり延期となった。また、海外渡航を予定していたができなくなった。全体の研究計画も内容を一部断念した。
海外への調査、視察をする予定であったが、すべてキャンセルとなった。
海外への渡航が延期された
海外へ行けず、研究計画の変更を余儀なくされた
海外出張ができなかった
海外出張ができなくなった
海外調査が出来なくなった
海外調査に行けなかった
海外調査の中止
海外調査へ行けなかった
海外調査や国際学会への参加ができなかった
海外渡航ができなくなったため基礎調査を延期せざるを得なくなった
海外渡航の許可がおりなかった
外出（移動）しての文献調査に制約が生じた。
外出が制限された。
外出の制限があった

自由記述内容

外部インタビューが出来なかった

外部者や面会者の院内への禁止ないし制限

学会がオンラインになったことで研究分野の近い研究者と情報交換ができなかった。名刺交換もできなかった。また、性暴力やDVなどが研究テーマなので性質上、オンラインでお話をうかがうことが難しく、調査ができない期間が長く続いた。地方の方には調査の依頼をするのが難しい（関東から来たというと嫌がられる）。大学に着任してすぐコロナだったので教員間のネットワークが構築できず孤立しがちである。

学会に行けない

学会の中止、オンライン授業対応などの繁忙

学会や研修会が開催されなかったり、オンラインでの開催で満足できなかった

学会参加がウェブになった、対面での研究が進められず研究の進捗が遅れた

学会参加分の予算消化が異なり、もったいないと思いました。

学校活動での対面での連携が取れなくなった

学生の学びを止めないように、オンライン授業に慣れない学生の対応をオンラインで昼夜にわたって行い、自身の健康を著しく損ない、研究活動そのものできない状況になった。コロナ禍でも、学生を現場実習に送り出すことについて、学生や保護者対応にも時間を割き、自分の研究時間を確保できる状況ではなかった。

学内業務の負担が急増したため研究時間が著しく減少した

活動範囲が制限されたため、限定的となった。

活動範囲の縮小や誹謗中傷

患者対象の研修の依頼や相談が難しくなった（感染リスクを考慮して）

感染の後遺症と、調査出張が難しかった。

感染拡大時期には対面調査ができなかった。

感染対策

感染対策に莫大な費用がかかった

感染対策等の他の業務が増え、研究活動ができなかった。

感染予防の側面から介護サービスの利用者様への調査の協力を得ることが難しい状況

観察調査が実施できなかった。現在も状況に左右される。

技能実習生と面会しインタビューを予定していたが、施設内へ入ることができなかったため、実現しなかった。

共同で研究をする人たちと対面で話せない時期があったが、オンラインで話し合う手段の活用が進んだ。

共同研究が困難であった

共同研究で集まる機会が制限された

共同研究者との書類や物品等の取扱い（授受等）がしにくくなった。

共同研究者との対面での調整などが難しくなった

共同研究者と直接対面できないため、全てZOOMで実施した。予定した調査協力者が突然コロナに罹患し、直前キャンセルとなったこともある。

協力予定機関の協力辞退

業務で手一杯となり、研究活動どころではなかった

勤務先であった大学の指導担当学生や調査対象者等との対面方法の調整と研究データの収集法

具体的な話が聞けなかった

刑務所や少年院の見学ができなかった。

計画通りに調査ができなかった。

自由記述内容
健康観察の記録、大学生のアンケート調査に協力したが学生の健康チェックなどの必要性が出た
研究がすすんだ
研究が進まなかった
研究したことを発表したり園での啓蒙活動をする機会がなくなった
研究そのものに関して学ぶ機会はむしろオンラインなどで、増えて良かった。が対面で会える機会が減ってしまって具体的な関わりが出来ないので深めにくいところがある。
研究に割く時間を捻出できなかった
研究フィールドが無くなりました。
研究フィールドへ行くことへのためらい
研究会の開催や参加に当初はかなり影響を受けた。そのごZOOMなどの利用が定着したため、若干の改善はあったが、影響は少なくなかった。
研究活動がストップした
研究機会の減少
研究協力が得られにくくなった。協力先がコロナの対応を優先していたため、依頼できるような状況ではなかった。
研究協力依頼を対面で説明できないことから、研究実施自体を諦らめた
研究計画の縮小変更
研究計画の遅延
研究計画の中断
研究現場に行くこと
研究実施自体が困難となったこともあるが、所属施設の業務（講義・実習）への対応に時間をとられ、研究どころではなくなってしまった。
研究出張ができなくなって、研究費申請書通りに調査が進まなかった。
研究対象のフィールドの活動が少なくなっていた
研究対象の方々がまだオンラインやグーグルフォーム等に慣れていないので、説明や対応のサポートなどに苦労した。
研究対象者から感染リスクを懸念されたことによる対面でのインタビューの拒否
研究対象者の協力を得られにくかった
研究仲間との交流が少なかった
研究調査の前段階で、オンラインが不慣れな対象者に、オンラインの操作の説明をすること
研究内容がコロナに関連するものになった。科研費の研究が大幅に遅れた。
研究内容を文献検討に変更し実施した
研究発表の機会の減少 ワークショップの中止 現地調査や支援活動の中止
研究発表の数が減った。
研修とのつながりを作れなくなった
県外への移動の制約
見学や面会制限があった
現場セミナーを開催したかったができなかった
現場での介入研究を計画していたが、すべて行うことができなかった
現場に入ることが制限された
現場への訪問調査が不可能になったこと

自由記述内容

現場対応が忙しくて研究どころではない雰囲気
現職が変わってから、コロナ対応が異常に厳しく県外に出ることがまったく出来なくなった。
現地でのフィールドワークがしづらかった
現地での調査に行くことでの他の仕事への影響
現地取材ができなくなったこと
現地調査（視察、インタビュー）ができなかった
現地調査が制限された
現地調査が遅れた
現地調査などができなかった
現地調査など全てできなくなった。研究よりも教育活動に時間を取られ、研究まで余裕がなかった。
高齢者を対象とした研究をしていたため、対象者に直接会うことが難しくなった
高齢者を対象とした調査ができなくなり、研究計画を大幅に変更せざるを得なかった
国際調査の中断、延期等
参与観察の対象を拡大できず
仕事上、研究に取り組む時間が取れない
思うように進められなかったり、一時休止した部分もあった。
指導教員・教授とオンラインの話し合い
指導者から直接指導が受けられずメールでやり取りした。仲間とも同様。
施設がインタビュー調査に応じてくれなかった
施設職員を対象としていたが、施設側から断られ、想定していた研究が実施できなかった
視察やインタビューを対面で実施することが難しい
視察等に行けなかった
資料収集における外出制限
資料収集や調査に制限が生じたこと
資料調査が出来なかった
時間的な余裕ができた面ではプラスであった
自らの感染
自治会へのアンケートすることができなかった。
自粛になり、参与観察とインタビューが断られた
実施できない
実践が行いづらくなった
実践への影響が大きく、学会への参加や論文執筆の時間が取れなかった。
実践を行うことでのデータ取りのための実践そのものができなかった。
実践活動イコール研究活動であるため、やむおえず停止。
実践活動が中止になった
実地調査ができなかった
社会福祉現場での感染症流行による調査調整が難航した
住民の意見徴集ができなかった

自由記述内容
出張
出張が減った
出張の制限
出張を取りやめた
所属校館内でしか調査ができなかった
情報の入所が限られた
情報交換の場が減った
新しい情報を得る機会が減少した。
新たな研究計画を考えるにあたりコロナの影響を考えて立案するようになりました（福祉施設への出入りや高齢者へのインタビューが可能かどうか等）。
人と接すことに制限があった。
人を対象とした実験ができない
人数制限をした
図書館が閉館したり、抽選制で利用人数が限られた。自由に移動ができなかったため、資料収集や訪問調査等ができなかった。
図書館に行ったり、資料収集が自由にできない。
図書館の利用制限による資料閲覧、収集困難
図書館等が利用できない。インタビューでできない、
図書館等での調査がしづらくなった。
専門職や高齢者等の本人を対象とする研究であるため、移動制限や接触制限、業務増加などで研究自体が困難であった。
相手が出勤していない
卒業論文
他の業務に時間がとられ、研究活動の時間が少なくなった。また、研究調査も遠慮する必要があった。
他の研究者との相談や打ち合わせがやりにくくなった
体温測定や換気、消毒、入館記録を徹底するよう努めた。
対象が絞られた
対象者との協働作業、インタビュー調査、参与観察等の制限、延期または中止
対象者との接触を減らす必要があった
対象者に調査協力を求めたいが、依頼すらできない状態が続き、また対面でのやり取りが主なものだったため、オンラインの環境に慣れていただくまでにかかなりの時間を要した。
対面、集合での調査協力を求めにくくなった
対面が出来ず、調査内容が弱い
対面でインタビューできなかったことが最も大きい
対面でインタビューなどができない
対面でインタビュー調査を実施する際、感染症対策を講じるのが大変だった。
対面でのインタビューが実施しづらくなった
対面でのインタビューや、交流事業の実施、評価ができなかった。
対面でのインタビュー調査ができなかった。

自由記述内容

対面でのインタビュー調査ができなかったので初めてお会いする人でもZoom対応だったため雰囲気がわかりづらかった。

対面でのインタビュー調査等ができなくなった

対面でのスーパービジョンが出来なかった

対面での介入が行えなかった

対面での活動ができなくなったから。オンラインで切り替えて実施することも少しはできたが、多くは対面だったため。

対面での活動に大きな支障が出ていた。

対面での研究がむつかしくなった

対面での研究会ができない

対面での研究活動ができなくなった。臨床でのスーパーバイズができなくなった

対面での交流機会の減少

対面での講座運営が出来ずオンラインで行ったが準備運営

対面での情報交換、検討ができず実感が薄まる

対面での情報収集が困難となった

対面での生活史調査ができなかった。調査を予定していたフィールドがコロナの影響で未開催が続いた。

対面での調査が制限された

対面での調査をためらうことがあった。

対面での調査実施・資料収集への支障

対面での調査実施が難しい

対面での話に制限があり、信頼関係を構築するのが難しいと感じた

対面で行う予定であったインタビュー調査がzoomでのインタビューとなったり、対象者によってはインタビュー調査を行うことができなかった

対面による研究活動の制限

対面による情報交換などに制限があった。オンラインは心身共に疲労感が生じ、時間的にも長い時間を必要とした

対面による打ち合わせ・情報交換ができない

対面による発表機会やコミュニケーションの制約

対面の困難

対面の手段が減少

対面の調査ができなかった

対面ベースだったものをオンラインに変更した。

対面を避けたオンライン等での実施

対面回避、Web開催

対面機会の制限

対面型インタビュー調査が実施できず、調査対象が限定された。調査対象の生活が通常時と変化していた。

対面聴き取りができなかったこと

対面調査に制約があった

対面調査の調整が難しくなった

対面調査や研修ができなくなった。対象となる現場がなくなった。

自由記述内容

大学の入校制限
大学への出勤制限
大学業務におけるコロナ対応に時間が取られ、研究時間の確保に苦労した。
大学業務に追われて研究時間がほとんどなくなった。海外への調査ができなくなった。
大学研究室に行くことがほとんどなく、自宅以外のワークスペースを借りた。
単純に、研究にあてる時間がなかった。
地域、または施設等の流行状況により活動に制約を受けた
地域での活動への参加が難しくなった
地域での調査がほとんどできなかった
地域活動が停止し、活動者と顔を合わせる機会がなくなった。
調査（資料を探す、インタビュー調査等）ができなかった
調査ができず進捗が遅れた
調査ができない、調査日程が変更になる
調査が延期になったことと、仕事が忙しくなり、ゆっくりと研究に取り組む時間がなくなったこと。
調査が計画通り進まなかった
調査が実施できなくなり研究手法を変更せざるをえなくなった。また、授業のオンライン化対応、社会福祉士実習の対応・調整、ソ教連の長いアンケートへの回答などのためそちらに時間が割かれ、研究に充てる時間がそもそも確保できなくなった。
調査が制限された
調査スケジュールが感染状況に左右された
調査スケジュールが大きく滞った反面、オンラインで様々な機会も得られた。
調査などに行けなかった
調査に出向くことができなかった。対面でのゼミがなくなった。
調査の延期、論文作成の遅れ
調査の延期、面接の中止、面接時のマスク等の感染対策
調査の際にコロナについて検査が必要になったことがある。
調査の中止で文献研究に頼らざるを得なくなった
調査の難しさ
調査フィールドを得ることが難しかった。
調査を延期し、進めることができなかった。
調査を実施できなかった、共同研究の打ち合わせが行えなかった
調査延期 会合をリモートにする
調査活動、会議開催
調査活動にでかけられない、研究会を開けない
調査期間を延長せざるをえなかった
調査計画はコロナ禍の二年間にとどまってしまった
調査研究に行けなくなり、研究仲間との研究会のオンラインで形骸化した。
調査研究のスケジュールが狂った

自由記述内容
調査研究の中断と延期
調査研究をする時間の確保
調査施設のリクルート
調査自体に遅れが大幅に生じた
調査実施が困難であった
調査実施施設（医療機関）との連絡調整、研究協力が多忙を理由にキャンセルされた
調査先の人たちとの関係性が薄れた気がする
調査対象などへの接触が制限された（対象者から辞退されるなど）
調査地に行くことは延期した。
調査範囲を近隣地域を対象に下物や縁故法のみになった
直接現場を訪問する機会の制限
直接施設や人へ調査することができなかった。調査しなければ研究が進まないため、研究がストップした。
直接的なコミュニケーションがとりにくく、意図をしっかりと把握できていない可能性があった
渡米できなくなった。
都市部での会合に参加できなくなった
当時の勤務校（大学）での教務の仕事が激増して、研究どころではなかった。
当時は専門学校に勤務していましたが、ネット環境が整っておらず、日本人・留学生の対応に追われ、研究活動どころではありませんでした。
特にない
日程等の予定の変更
博士課程進学に向けた指導教授との打ち合わせができない
文献・史料へのアクセスが制限された。
文献収集のための図書館入館が制限された
聞き取り調査ができなかった
別に大きく受けていない
報告会をリアル開催からオンライン開催に変更した
方法がミックスになって調査結果のむらがあるのではないかと感じている
訪問、インタビュー等
訪問調査が困難
訪問調査が困難（協力先が得られない。協力が得られても方法や時間に制限あり）
訪問調査が難しくなった
訪問調査の制限
訪問調査の予定が組めない
本業がコロナによる影響への対応であり、業務過多となったため、研究活動は停止した。
本来の研究計画を大幅に見直す必要があった
面接がすべてオンラインとなった
面接の制限等
面接時間の制限

自由記述内容
面接調査がおこないにくくなった
面接調査の一部を書面で代替
面談できず相手の表情から真実や感情を読み取りにくかった
予算の廃止
予定した調査ができなくなった
予定していたインタビュー調査が実施できなかった
予定していた介入ができず、予定を大幅に変更した
予定していた研究ができなかった。
予定していた研究活動の方法や頻度を変更した
予定していた研修や講演、研究活動が中止となった
予定していた実践研究の回数を減らして結果をまとめた。
予定していた調査がキャンセルになったこと
予定していた調査が延期になった
予定や基礎となる価値観が変化してしまった
予定通りの研究が不可能になった。
量的調査はできたが、質的調査を控えていた。
倫理的配慮としてコロナ対策をしてインタビュー調査を行った。
臨床活動の制限による研究デザインへの影響
臨床研究が困難になった
調査及び地域の関係機関と連携

□ Q7-6. 研究活動全般へのコロナ禍の影響を受けた具体的内容をお答えください。

自由記述内容
①遠隔面談ツールの質的向上など（画質などの向上、セキュリティ確保）、②在宅活動が増えることにより打ち合わせなどが私的時間に食い込む。研究活動の特性（業務と個人活動の不可分性）から難しいと思うが、研究における「つながらない権利」への考慮（家庭があっても参加しやすいルール作りの提言など）も必要か。③（短期的な成果を求めることや研究者の問題意識を軽んずることではないが）コロナ禍で協力してくれる相手の厚意・熱意に応える活動や成果、そしてマナー（謙虚さ）が必要ではないか（研究者の問題意識や事情を前面に、協力が当然という態度で来られ、協力後になしのつづて、あるいは概要を見ても先行研究と同じ結論（確認も必要でしょうが）では、協力いただいた当事者に説明のしようがない。コロナとは関係ないし、研究者の個人的な差かもしれないが、福祉に関係するのであれば大切にしてほしいし、各学会も注意喚起してほしい。）。
2018年までに一連の調査を終えていたので、データ収集の面では、今回のパンデミックによる影響はなかった。今回の経験を生かして、高度なオンライン環境の整備を日頃から行っておくことが大切であると思う。
ICTスキルの向上
ICTを活用した研究活動にかかる経費の助成
ICT化が可能なところは日頃から利用・適応できるようにしていく。個人でも組織でも日本全体において。
ICT活用についての情報共有
ICT環境の充実とICT利用の組織理解
ICT環境への支援体制も含めた充実
MTG、インタビュー等をオンラインで行う仕組み作り
Webによる調査
Webの活用
Webの利用
Web会議等の支援
web環境の拡充
ZOOMによる研究は、大学のアカウントでは実施できない規則であった。個人の無料アカウントでは時間の制限があるため、大学のアカウントで研究の許可が出ることが望ましい。
Zoom形式などでの開催決行
ZOOM等の設備
アドミニストレーターや教育活動の補助ができる人材配置を増やすこと。アクティブラーニングなど、コストがかかる教育方法を強いておきながら教員の補助ができる人材育成が遅れている。私の助手は学科全体の秘書的な仕事をしており教務補助としてはまったく使えなかった。一人で全部やらなければならない環境で教育も研究も成果を上げると言われても無理である。
ある程度ノウハウはできたと思う（一般の方を含め）
エッセンシャルワーカーが普段から余裕をもって働く体制を持続的なものにする
オフィスソフトの使用権利の値引や無償レンタル、オンライン機器の無償貸与
オンライン
オンライン、条件
オンライン・オンデマンド型の学会開催等
オンラインがもっと自由にできる環境が整う事。
オンラインツールの活用
オンラインでインタビューを受けてもらう
オンラインでの参加、録画の一定期間共有

自由記述内容

オンラインでの対応
オンラインでの対応のやりやすさ
オンラインでの調査や研究ができるような機器やソフト購入の補助。
オンラインでの通信環境、フレキシブルな勤務形態
オンラインでの連絡指示は分かりにくいので紙媒体が良い
オンラインで可能なことは、極力オンラインで。
オンラインで学会や研究会が開催されるようになったことは進歩だと思っています。海外ともつながれるようになりましたし。今後もオンライン上の情報交換やミーティングの機会は会って欲しいと思います。
オンラインで発表するなどの方法を有事以外でも常時実施して欲しい。フィールド開拓の際に、先方の状況にもよるため一概には言えないが、学会として関係機関や団体、自治体に対して調査への協力要請を行う、あるいは文書で協力をお願いなどの後押しがあると、良いかもしれない。学会のメンバーで共同での調査を受け入れてくれるフィールドのリストや問い合わせができるなど、具体的な調査が個人または集団で行うことができるような環境があると、研究の停滞の可能性が低くなるかもしれない。
オンラインで聞き取り調査ができるといいが、対象によっては困難だと思う
オンラインとできる限り対面授業
オンラインにスムーズに移行できる準備
オンラインによるインタビュー方法への注意事項への支援
オンラインによるセッションでも調査可能な研究を試みる必要がある。
オンラインによる研究環境を構築する経済的な支援
オンラインによる心理支援
オンラインによる調査の環境が協力者側に整っていること。ネットのセキュリティが原因で協力できないということもあった。
オンラインのセキュリティ対策
オンラインの拡充
オンラインの活用
オンラインの環境整備
オンラインの充実
オンラインの推奨
オンラインの設備がもっと充実したらいい。物理的環境、マイク、カメラ等の設備がもっと整えばいいなと思います。
オンラインの徹底
オンラインの普及
オンラインへのスムーズな移行
オンラインへのフリーアクセス
オンラインへの移行はスムーズにできるようになると思いますが、対面でのやりとりが難しくなるため、研究期間の延長などの対応があるとよい。しかし研究対象は生活施設でもあり、オンラインであってもインタビューなど行うことは難しいと感じる。今回実施できたのはパンデミックが落ち着いてからであった。
オンラインへの切り替えがスムーズに進めばできることは多いだろうと思う
オンラインミーティングの普及支援
オンラインを行ううえでの各種の支援

自由記述内容
オンライン化または対面に伴う心理的援助等
オンライン会議システムの利用。
オンライン会議の積極的活用
オンライン学会の開催
オンライン活動をリアルタイムで且つ少人数で行う事が大切かと思う。
オンライン活用
オンライン環境の活用以外の方法が浮かばない。
オンライン環境の充実
オンライン環境の整備
オンライン環境の整備は非常に大きかったと思います。そのような環境整備の支援があると良いと思います。
オンライン環境の整備への金銭的支援
オンライン環境を早期に作る事で防げた
オンライン技術の活用とその技術ならびに活用の具体的習得方法の効率化
オンライン使用による人的交流
オンライン授業の負担を減らして欲しい。
オンライン授業の補助
オンライン体制の構築、経済的補助または免除
オンライン対応への切り替えが素早くできること
オンライン調査手法の進展
オンライン普及
お尋ねは「研究の停滞を防ぐための支援」ということかと思われるが、私自身の研究対象が一般市民である以上、一般市民の日常生活に支障がない状況でなければ、研究停滞を防ぐための支援は現状では思いつかない。
コミュニケーション／調査対象となる方々に高齢者が多いため、ITツールの設定・利用がもっとユーザーフレンドリーになっていくとよい
コロナでの経験をどこかに整理をしておく。停滞の多くは、判断が個人や機関に委ねられるところが要因であり、その意味では、学会・組織・個人ができるだけ孤立しないように日頃から呼び掛けることが大事だと考える。
コロナ禍の経験をもとに、過度にパニックにならずに粛々と進めていくしかないのではないかと考えます。
コロナ対応に意外と手間がかかって、業務が増えた。が、経済的に不透明な状況で新たに雇用は無理。失業した人を国費で雇って、動いているところに派遣するといのではないか。
ゾーニングと遠隔コミュニケーションの徹底
その感染症の予防や治療に関する正確な情報を早く広めること
その時に考える
その時の状況（社会の情勢等）にもよるので、分かりづらいが少なくともICTを活用した支援はもう少し充実することが必要だと思う
その時々で違うと思うので、回答が難しい
その状況に合ったIT機器の操作ガイド等
そもそも、パンデミックが起こった場合、研究の停滞を防ぐ必要があるのかどうか疑問。まずは国民の生活、経済活動の停滞を防止して、研究の停滞は2の次、3の次だと思う。
そもそも新型コロナウイルスが日本国内でパンデミックと考えていない。
デジタルデータやオンラインの積極活用

自由記述内容
どのような困り事を想定すること自体がむずかしく、金銭による補填がもっとも望ましい
どのような面での停滞を指しているのが難しいところですが、研究ということであれば、当事者へのインタビューが体調面の配慮をもとに実施しなければならないので、その点はオンラインでも十分に実施できることは明白なので、倫理上の問題を対面と同様に考えてほしい。
どんなに停滞しても、ともに励まし合い、認め合うことです。
ない
なし
ネットでの情報アクセス
ネットで調査や研究発表などができる場があればよいと思う。
ネット環境の充実
ハイブリッド 正しい感染予防知識の普及
ハイブリッド環境の整備など
パンデミックであることを受け入れ、できる範囲内で研究を実施すれば良いのだと思う
パンデミックではある程度しかたないと思うが、パンデミックにかかわらず普段から、生活・仕事・研究にオンラインを取り入れておくことが必要だと思った。
パンデミックによる研究遂行が遅れてしまう研究者への成果のカウントへの対応
パンデミックに際して社会科学系、特に社会福祉学のような実践活動を対象とする研究の場合、研究活動の停滞は避けられないと思う。一部の研究者が行っていたように、コロナ禍に求められる研究テーマに変更するなど、研究者の側が柔軟に対応するしかないのかもしれない。コロナ禍においてオンラインツールの活用がかなり進み、私自身もある程度は活用できるようになったが、ツールに係る費用やより簡易で活用しやすいツールの開発および活用方法のサポートなどがあれば助かる。
パンデミックの際でも子どもの預かりなどができる備えや対策
パンデミックの内容にもよるとは思うが 学術学会としてプッシュ型で〇〇の支援ができますなどを打ち出してはどうか
パンデミックの内容により柔軟に対応できる実行性のある政府組織
パンデミックの有無に関わらず育児と研究の両立は相性が悪い。コロナ禍も重なって最悪だった。
パンデミック時に限ったことではないが、大会を複数回開催するのであれば、その内の1回程度はオンラインによる開催でもいいのではないかと思う。
ほぼオンラインでの情報交換が可能になったので大過はない
まずは人命救助に対する支援。研究以前お問題だと思う。
ユニバーサルなオンラインコミュニケーションやバリアフリー
より迅速な情報共有
リアル、webのいずれも社会的インフラとして整備され日常から使い慣れる環境を平常から整えておくこと
リモートの充実とハイブリッドの促進
わからない
わかりません
安定したネット回線
医療の観点からの見解・対策を絶対視しない世論形成が必要
医療系の支援
一斉休校等で育児負担が増すので、子供の預かり場所の確保や訪問による育児支援。在宅勤務への移行による収入減に対する経済的支援。

自由記述内容
遠隔で研究を行うための環境整備サポート
遠隔機器やグーグルフォームなどの活用
遠隔調査時の信用度（相手に協力してもらう）
何の停滞か掴みかねるが、仮に研究活動とするならば、インタビュー等を行う時に抗原検査等が必要となるケースがあるので、その助成があると助かる。
何の停滞を防ぐのか、質問の意味がわからないのでお答えできません。
科学的知見に基づき過剰に反応しないー京都大学宮澤孝幸准教授の見解を参考にー。
科研費の柔軟な運用。
過剰に恐れない雰囲気を作ること
過度な移動制限等が無いように、パンデミックの状況と対応方法に関する正確な情報の提供
会員サービスの充実
各地域（サテライトや地域支部単位）での分散開催の会場提供 屋外開催
学会、ソ教連が、教育・研究とリスクのバランスのなかで、ガイドラインを作り、加盟校、国、市町村に働きかけて欲しいです。BCPの作成も意味があるかもしれません。
学会に求めることは特にありません。
学会活動の影響を勘案したガイドラインや方針の迅速な提示。
学会参加費の減額
学会誌がオンライン調査への偏見をなくすこと
学会等からの公式アナウンスなどを行い、研究者等の立場を守る行動が必要に感じます。
学外の研究費の研究期間の延長。その環境に応じた金銭的支援の充当。
学術発表の柔軟的な対応
学生の実習内容に大きな影響があったので、臨地での実習が確保されるための具体的支援
学生達への端末の至急やWi-Fi環境の強化
感染に伴う休暇に関する支援
感染対策と情報共有
感染対策を十分に講じておく、抗原キットの準備
感染防止対策、リモート面接方法の普及
換気や罹患しないような設備の整った面談から大会議までできる空間の貸し出しを役所などが行ってくれる支援
環境ごとの感染拡大防止のための処置を提示してほしい。
環境の整備がたとえあっても、施設内への持ち込み、クラスター発生に対応する労力を考慮すると、職場の意識を変えることになると思うが難しい。
規制をかけないこと
競争的研究費の研究期間の延長など
教育活動対応をもっと柔軟にして、研究できる余地を残してほしい
経済的支援
検査キット等の支援、オンライン整備の経済的支援など。
研究データのオープン化
研究に活用するツールや手法等の情報共有
研究に関する移動制限の緩和

自由記述内容
研究に対して職場の理解があることが第一かと思います。今は転職し、現在の職場はある程度理解がありますが、コロナ禍の最中は（以前の職場において）そういった理解が得られなかったため大変でした。
研究の仕方の成功例の迅速な共有
研究はすすむ
研究より実践が先であるため、停滞は免れないと思う。
研究安全ガイドラインと、その認定
研究活動に専念できる状況でなく、「停滞」しないことはありえないのではないのでしょうか？
研究環境、研究室があれば進めていける。
研究環境を担保するための経済的支。パンデミックの状況を的確に判断し、適切な対応を提示する（無駄な厳しさのない）組織風土の形成およびそれに役立つ学会からの対応声明。
研究期間の延長
研究期間の延長、研究計画の変更
研究期間の延長、研究方法の変更など
研究機関、学会としての業務継続計画の作成
研究機関所蔵資料の公開
研究協力者の存在（当事者・支援者）があつてのものなので、「支援があれば停滞しない」というものではないと感じる。
研究支援金やオンラインを活用した学会活動
研究時の感染予防マニュアル
研究者が孤立しない支援
研究情報の提供
研究費の金銭的支援。職を失い研究費が捻出できなくなり継続困難になることを防ぐため。
研究費用と論文資料費用の支援
研究補助員の確保
現在では対処方法が見えているのでなんとかなりそう
現場が絡むことなので無理だと思う。研究テーマを変えるなどの対策をこちらでとるしかない。
現場のネットワーク環境を整える支援
現場の実践者としてはどうしても研究は2の次になると思われる。
現地とのオンライン調査などで停滞を防ぐことも必要だが、感染対策が重要
誤解を招く報道や、それによって起こる同調圧力などを招かないように、マスコミチェックや正しい報道がなされるよう確認していただくこと。
行動制限の緩和
国による具体的な感染予防策の提示
国の方針がはっきりして、職場の事務体制が機能不全にならないように日頃から強化する
国会図書館が実施しているデジタルコレクションのような資料公開をする図書館が増加することを望む
今は不明

自由記述内容

今回のCOVID-19もそうであるが、まずは感染症そのものの脅威を正しく評価する必要がある。そして、緊急事態宣言などを含めた感染対策などのゴールをどこにするのかなど明確に示す必要がある。感染対策には弊害があることも十分に認識すべきである。介護や福祉系の専門家は、生活を守る専門職として現在も続く「感染対策」について異を唱える必要がある。そうでなければ生活を守る/支援する専門職とは言えない。今後のパンデミックへの対策や支援を考えるのであれば、まずは今回のCOVID-19の騒ぎを冷静に、多角的に振り返る必要がある。

今回のコロナ禍を契機に原則として研究活動は対面でもオンラインでも対応できるルールや体制を作っておくとよい。

今回のパンデミックで間接的な対応が可能となったが、同じようなことが起こった場合の環境整備を整えておくこと

今回の経験がうまく残れば、オンラインへの速やかな移行が今後は可能となるのではないのでしょうか。

今回を機にオンラインの導入が進み、またスキルも向上したので今後はうまく切り替えながらやっていけると思われる。ただ、子ども世代には対面でのコミュニケーションが必要だと思う場面が多々ある。大人（職場）の問題ばかり目を向けず、もっと子ども世代にも目くばせが必要。コロナから回復した現在もプライベートで遊んだりだらだらしたり、という時間がもてなかったり、誘いかけができなかったりしてかわいそうに思う。集まって話したり食事をしたる場を大人がある程度用意してあげる必要も。

今回を機会に広まった遠隔システムをフルに活用できるよう、インフラと財源が確保される。

今回科研費の対応として終了期限の延長ができたので、そのような支援は必要である。

今後のことは想像しにくいですが、ネット環境（通信品質の改善やそれに適したデバイスの開発）がより改善できればパンデミックの影響は抑えられるような気がしています。

在宅でも研究が続けられるような環境整備。SPSSの使用など。

在宅勤務

在宅勤務の経費手当

在宅勤務の幅広い導入

仕事でオンラインのテレワークの導入してほしい。

史資料のデジタル化・オンライン公開の拡大

思いあたりません

思いつかない

思い浮かばない

資金援助

資料・論文・文献の電子化促進

自宅でリモートなどの手段で自由な研究的アプローチができること

自由裁量の多い研究資金の提供

質的研究をおこなっている関係上、ある程度の停滞は難しいと考える。ただし、オンライン会議ツールの利用がアカデミックアカウント保有者はしやすかったため、それは助かった。

実際にその状況になってみないとわからないところはあるが、何かあった時にはオンライン対応ということを前提に考えておくようにすれば、何とかできるのではないかと考える。

社会活動全般で、オンラインを受け入れそれを具体化させる手段が構築されること

社会全体がオンラインによるコミュニケーションに慣れて来たため、あまり大きな支障がなくなってきた

若手・中堅が意思決定機関にいること

手洗いマスク着用を義務つける

手伝ってくれる人を増やす

柔軟性

所属機関の業務に時間を取られすぎないように、教育に関わるツールなどの支援があるとよい

自由記述内容
所属先等におけるオンラインおよびオンデマンド活用に対する速やかな認可
焦らず成り行きを見守る
情報収集を行い、現状を把握すること。その上で、何が必要なかを判断し、発信すること。
情報通信体制の充実（調査が容易になる環境た体制）やそれに合った経済的な支援など
職員に急な休みが生じてもゆとりある対応が可能な人員体制
職務優先なので
心理的支援が必要である
遂行より柔軟性
正しい情報提供と統一した社会ルール
正しい知識
正しい知識の普及、感染を過度に恐れない
正確な情報伝達
先ずは、金銭（収入）補償
先の見通しができるような支援が必要
全ての人がりモートを使いこなせる環境整備
想像つきません
相互扶助の体験を市民教育として展開すること
対面・オンラインの併用
大学としてCOVID-19に関わる研究事業の公募があり、2022年8月に採択されたため、パンデミックと社会福祉との関連にかかる研究活動を実施することが可能となった
大学の業務負担、オンラインの整備を引き続き行う
大学図書館の全面オンライン対応
大学図書館の利用制限を最小限にする。
第69回秋季大会のような学会のオンライン開催
調査の対象を柔軟に変更できるシステムを整えること。
調査研究やフィールドワークはあきらめて、すぐに理論研究や基礎研究に切り替えるようにしたい。
調査対象の受け入れ意識の醸成
調査対象施設や人に対してインタビュー調査をする際に、Webカメラなどの機器を貸し出ししていただくと助かります。
調査対象者と調査実施者双方の環境が整わなければ調査不可能のため、こちらに以下に補助や手助けがあったとしても停滞を防ぐことは相手がある限り難しいと思われる。
調査対象者側には、テレワークやオンラインインタビューの環境が整備されること
調査地の人達にオンラインで話を聞くこと
直接人と会えないような感染症の拡大の場合、どのような支援があったとしても停滞は防げないと思う
通信環境や手段等のいっそうの整備・強化
通信機器の整備（Wi-Fiの整備や個人情報流失を防ぐセキュリティーの強化など）
通信手段が多様化し、オンラインも様々な手順になっているため、簡単で共通した手続きがあると助かります。
停滞は免れない。自身の心身の健康維持にも苦心した。メンタルヘルス、体力の維持なども重要かと思います。
停滞も含めてレジリエンスを考えること

自由記述内容
停滞を防ぐことはできない
定期的に近況をお尋ねいただけると孤独感が和らぐ。倫理審査の手続き簡素化。
的確な情報の入手
適切な根拠のある情報提供
適切な情報、正しく情報を伝えて対策できるような政治力とマスコミ
電波を最大限に活用する。パンデミックという嵐が立ち去るのを大人しく待つ。
統一された予防方法と正しい情報
特にない
特にない。
特にない。なるようにしかならない。
特になし
特になし。
特に求める支援はございません
特に思いつかない
日頃からテーマごとのメーリングリストを整備していく必要あり
日頃からの練習
日常的に書類手続きの簡素化、E T Cの活用などの備え
被験者に対するオンライン等の支援
非対面での学会参加体制の整備
非対面の領域を可能な限り少なくする。
病気の正しい知識を得る、オンラインを使う
普段から対面とオンラインを併用していると、パンデミックの時に特別な負荷がかかりにくいと思う。
副作用のないワクチンの早期開発
福祉分野でのICT
分からない
分からない。
文献・史料について、可能な限りオンライン上で閲覧できると有難いです。
予防を実施した上で、実施が許可される仕組み
倫理審査の内容の容易な変更ができるようにしたい。また、多様なインタビュー方法、例えばWeb面接インタビューも可能とするなど。
歴史に学ぶ姿勢が無いため、必ず停滞する。
パンデミックの状況のなかでも実施可能な現場環境、ICT活用により実施可能な環境

□ Q8. コロナ禍を経て、学会活動に関して課題になっていることを教えてください。

自由記述内容
1箇所に集まることが億劫になったと
①資料を自分で印刷しなければならない費用と手間が重い。自宅のインクジェットプリンタで大量印刷はやりにくい。質問するタイミングがオンラインだと図りにくい。
5類になったものの感染リスクに対しては予断を許さないという状況
Covid19は国内ではまだ完全に沈静化したとは言えない。よって、社会福祉施設などでのインタビュー調査も本格的な実施には至っていない。
ICTを活用した研究
webか対面かの開催に関する決定が遅い
Web授業の作成にかなりの時間がとられ、研究に着手できなかった。
Zoom1日の脳負担は学会会場に1日いる脳負担より桁違いに大きい。
zoomでの参加でも、リアリティのあるもの。会場の雰囲気を感じることができるものを期待している。
zoom会議が一般的になり、便利ではあるが物足りなさも強い
アンケート他活動が厳しかった
いつまでもオンライン開催をしていること 人が人と会って対話をすることの重要性を認識すべきだと思う
インタビュー調査で、オンラインが選択肢になった。
オンデマンドのための動画の用意が大変
オンデマンドやハイブリッドが当然となったため開催するための費用が対面のみと比べて増額した。参加者もオンデマンドやハイブリッドがないと不満に感じてしまうようになった。オンライン場で発表する際の守秘義務や個人情報保護、著作権の問題。
オンデマンド配信があることで、いつでも発表を聞くことができるが質問や意見交換ができないこと
オンラインから対面への切り替えによる集客の減少
オンラインが選択できたことで気軽に多くの学会に参加できます
オンラインが不得手な会員へのフォロー、オンライン開催の学会での発言の活性化、コロナ禍で停滞した研究の再開支援・発表の機会を増やす。などの。
オンラインが普及し、学会参加や発表の負担は減ったと思いますが、発表者以外のフロアでの共通の話題や研究課題の共有が難しくなりました。今年対面で学会参加してみて、対面で広がるネットワークがとても重要で、自分にとって必要だったのだと改めて感じる事が多くありました。チームでの研究がしやすくなる学会以外の仕組みが必要になっていると思います。
オンラインでの参加ができるようになり、参加頻度は増えたが、参加者とのつながりは減ってきたと思う。
オンラインでの参加が可能となり、交通費と移動時間をかけて遠方に出向くことに価値を見出せなくなりつつある。他の研究者とはZOOMなどで情報交換もでき、わざわざ宿泊を伴う学会に参加することをためらう。また、土日に学会があることが前提となっていることもあり、オンラインであれば平日の開催も検討の余地があるのではないだろうか。
オンラインでの実施による情報交換の不足
オンラインでは、頭に話題が残らない
オンラインで会議が開催できることの利点もあるが、いつでもどこでも出席できると思われ、負担が大きくなっている
オンラインで様々な情報が得られるようになっているが、研究倫理審査が求められる時代に、研究協力者から同意を得て入手したデータなどの投稿の事例などの情報がない。「『社会福祉学』への投稿論文における研究倫理に関する記述について」では、「所属先で研究倫理審査を受けられないケースへの対応」を問われることもあると指摘されているが、研究倫理審査が実施される前に、研究者が実施した研究の価値が尊重されない風潮になっている点が課題である。
オンラインなどに対応する人手不足

自由記述内容
オンラインに慣れてしまったため、開催地に出向くことに躊躇するようになった
オンラインに対応できない、高齢の学会員や、障がいのある学会員への対応
オンラインのほうが便利で気軽に参加もできるが、会員同士の交流がしにくくなった。
オンラインのみ開催
オンラインの研究会が増えて従来よりも参加回数が大幅に増えて良かった
オンラインの再活用
オンラインの便利さに気が付いてしまったので、「対面のみ」といわれると参加を渋ってしまうことがある。
オンラインの要望が強くなり、対面と合わせたコストが増大する可能性など
オンラインはもっと活用してほしい
オンラインへの切り替えに対応すること
オンラインやハイブリッド形式がコロナ禍終了後減っているのを残念に思う。遠方でも参加しやすいなどメリットもあるのでぜひ継続してほしい
オンラインを活用した開催はむしろ助かる
オンラインを活用する際の個人々の環境整備、環境状況の個別差
オンラインを経験してしまったことによる時間を有効に使おうという意識が過度に増強してしまったこと。学会で遠征してゆっくりすることも思考の整理などで有効であったと思う。
オンライン会議システムや対面の併用により得られたインタビューデータを同質のものと扱ってもよいのか、検討・整理すること。
オンライン開催における工夫・配慮等が不十分に思われる。
オンライン開催になったが参加費が以前と変わらない。
オンライン開催による直接交流、やりとりの欠如
オンライン開催のかかる時間
オンライン開催をどうするか。オンラインのみの開催だと、どうしても触れる情報が狭くなる。自身を含め社会性に課題のある者は、オンライン開催は気が楽だが、他の研究者と交流の機会が大幅に狭くなり、得られる情報も限られてくるように思う。議論を我がこととしてとらえる姿勢も乏しくなるように思う。
オンライン学会で参加者が減少し、会員も減少した
オンライン慣れ
オンライン環境の整備とそのため財源確保
オンライン参加がなくなった
オンライン参加が継続されると良いと感じている。
オンライン参加の選択肢が増えたことによるモチベーションの低下
オンライン対応があれば参加を考えるが、対面のみで遠方での開催となった時には、負担を感じるようになった。
コストがあがりすぎて賃金はあがらないこと
コミュニケーションの減少
コミュニケーションの減少と学会の機能
コミュニケーションの密度
コロナによる孤独孤立の影響（繋がりの喪失など）
コロナ禍が福祉施設に与えた影響
コロナ禍でオンラインという手段が特別なものではなくなったことは、ぜひ、継続してほしい。
コロナ禍で研究が止まっていたため、研究成果が予定より遅れている

自由記述内容
オンラインに慣れてしまったため、開催地に出向くことに躊躇するようになった
オンラインに対応できない、高齢の学会員や、障がいのある学会員への対応
オンラインのほうが便利で気軽に参加もできるが、会員同士の交流がしにくくなった。
オンラインのみ開催
オンラインの研究会が増えて従来よりも参加回数が大幅に増えて良かった
オンラインの再活用
オンラインの便利さに気が付いてしまったので、「対面のみ」といわれると参加を渋ってしまうことがある。
オンラインの要望が強くなり、対面と合わせたコストが増大する可能性など
オンラインはもっと活用してほしい
オンラインへの切り替えに対応すること
オンラインやハイブリッド形式がコロナ禍終了後減っているのを残念に思う。遠方でも参加しやすいなどメリットもあるのでぜひ継続してほしい
オンラインを活用した開催はむしろ助かる
オンラインを活用する際の個々人の環境整備、環境状況の個別差
オンラインを経験してしまったことによる時間を有効に使おうという意識が過度に増強してしまったこと。学会で遠征してゆっくりすることも思考の整理などで有効であったと思う。
オンライン会議システムや対面の併用により得られたインタビューデータを同質のものと扱ってもよいのか、検討・整理すること。
オンライン開催における工夫・配慮等が不十分に思われる。
オンライン開催になったが参加費が以前と変わらない。
オンライン開催による直接交流、やりとりの欠如
オンライン開催のかかる時間
オンライン開催をどうするか。オンラインのみの開催だと、どうしても触れる情報が狭くなる。自身を含め社会性に課題のある者は、オンライン開催は気が楽だが、他の研究者と交流の機会が大幅に狭くなり、得られる情報も限られてくるように思う。議論を我がこととしてとらえる姿勢も乏しくなるように思う。
オンライン学会で参加者が減少し、会員も減少した
オンライン慣れ
オンライン環境の整備とそのため財源確保
オンライン参加がなくなった
オンライン参加が継続されると良いと感じている。
オンライン参加の選択肢が増えたことによるモチベーションの低下
オンライン対応があれば参加を考えるが、対面のみで遠方での開催となった時には、負担を感じるようになった。
コストがあがりすぎて賃金はあがらないこと
コミュニケーションの減少
コミュニケーションの減少と学会の機能
コミュニケーションの密度
コロナによる孤独孤立の影響（繋がりの喪失など）
コロナ禍が福祉施設に与えた影響
コロナ禍でオンラインという手段が特別なものではなくなったことは、ぜひ、継続してほしい。

自由記述内容
コロナ禍で研究が止まっていたため、研究成果が予定より遅れている
コロナ禍によって分断された意識と研修活動の再構築
コロナ禍に起こった地域生活課題は、災害時における地域生活課題の出現と類似しており、いかにコロナ禍に顕在化した地域生活課題を解決するのは大きな課題である。それらの地域生活課題に対応する制度や支援の整備や、そもそもの社会のあり方も含めて検討する必要がある。
コロナ禍前の「全て対面で」へと考えなしに戻すこと。
コロナ過の影響に関する調査実施
コロナ前の状況への復帰
ズームなどが相当広がったことによって対面しなくても良いという空気が生まれてきている 調査活動など対面しなければわからないことは多々あると思うので原則はコロナ前に戻すべきではないだろうか ただし、遠距離などズームを活用の方が効率が良い場合などは一定のルール(一度は直接面接するなど)を設けて、併用することも可能だと思う
すぐに思いつきません
すぐに思いつきません。
すべて対面に戻ってしまわない方がよかったのではないかと
せっかくオンライン等の活用が進んだのに、「対面のみ」に戻りつつあるため参加が制限されてしまう。オンライン等の活用をもっとしてほしい
その学会の理念に合わせて、全国大会の開催方法(対面、オンライン、ハイブリッド等)を選択できているかということ。
タイムリーな情報交換や対人関係の形成
つながっていた人と少し疎遠になった
とくにありません
とくにない
とくにない。むしろオンラインでの対応等もあり、学会参加の環境は良くなっている。
とくに思いつかない
とくに無し
ない
なし
なんとなく会員同士の距離ができた
ネットで参加できるようになり、便利になったこともある。
ハイブリッド・対面の過渡期中途半端すぎる
ハイブリッドから対面になることで、台風等の影響で対面で参加できない場合に、これまではリモートが選択肢としてあったものが参加できない場合があった。
ハイブリッドが維持されて欲しい
ハイブリッドが主流になれば、地方の学生を誘いやすい
ハイブリットで開催していただけると参加しやすい
ハイブリットで学会参加が容易になった反面研究者の熱量が伝わりにくい。
ハイブリッドにしてほしい。発表よりも議論に時間をとってほしい。
ハイブリッドによる開催
ハイブリッドの場合、対面参加者の減少

自由記述内容
ハイブリッド開催
ハイブリット開催が増えて逆に利便性は高まったと感じている
ハイブリット開催の場合、対面で行く必要があるのが交通費面などで周りに対して気兼ねがある。
ハイブリット開催の良さを、今後も生かして欲しい。
ハイブリッド開催は参加者は便利だが、運営側の費用が高額になる。
ハイブリット開催を増やして、対面かオンラインを選択できるようにしていただけないかを感じる。
ハイブリッド開催等は今後も推進すべき
ハイブリッド形式の開催をするにあたり、業者に依頼すれば高くなりすぎるし、有志の会員でやるには責任が重く負担に感じてしまう為、費用を安くハイブリッド開催する方法が課題になると思う。
ハイブリット実施
ハイブリッド方式が取り入れられ、課題を前向きに活用できている。
ひきこもり、在宅訓練の是非
ブロック単位、県単位で身近な研究者たちと交流を持って行けたらいいなと思う。
メイン以外に必要な活動であるかを考えるようになった
モチベーションの維持
もともと研究の基礎体力がない上に、研究どころではなかった期間が入ったため、研究・論文投稿に対して敷居があがったこと。
よりダイバーシティとセーフティに配慮された学会運営が求められると思います
リモート参加が当たり前になった現在で、対面開催の意義とは何か。複数の学会誌（紙）が休刊を余儀なくされ、新たな会員獲得の秘策はあるのか？
わからない
わからない。
意見交換などができない
医療、福祉ではまだフリーになっておらず、直接的な関わりに制限がある。
院生・若手がタテヨコのつながりを作れていない
延期になった研究が「賞味期限切れ」になってしまう恐れ
遠方の場合、直前まで予定が立てられず移動・宿泊の確保が難しくなった
何となくの私的感想で申し訳ないのですが、人と面と向かった活動が少し億劫になっているような気がします。学会活動だけでなく研究活動にとってこれはあまり良いことではありません。
課題ではないが、集合・対面以外の方法が広まったため、今後の学会開催方法に却って迷いが生じている
課題はない。
課題は余りない。学会の委員会がオンラインになり便利になった。
課題をみつけるのが課題かと。
会うことが大事と対面のみに切り替えている学会もありますが、実務者兼研究者にとって今なお参加は難しいことも多いです。福祉系学会でこうしたことが想像できないのかなと残念に思います。
会員との交流の機会が減った。
会員の減少
会員の情報交換の場の減少、発表が大学院生の増加
会員同士の情報交換がしにくくなった。顔を合わせれば話題が広がり共通の課題も見えてくる。すべて一人で取り組むことになったように感じている。

自由記述内容
会員同士の情報交換が難しい
開催地への参加数が減少したこと
開催方法・参加方法の多様化への対応
開催方法と参加費
各学会の財政が逼迫していたので、オンラインでの会議により交通費が軽減されたが、コロナ禍後に対面での報告者が減ってしまったこと
学会がオンラインで開催された際には、人と知り合ったり情報交換できる機会がなかった
学会が対面であっても懇親会が開催されない場合があること
学会などが対面のみの実施となってしまうと、不慮の事態が発生した際に参加できないということが生じます。ハイブリッド開催（対面・オンラインが選択できる）が安心ですが、参加費を事前納入している場合は、事後に動画配信していただくと大変ありがたいと感じます。
学会に行き偶然の出会いの中で意見交換することの価値が下がった
学会に参加する意欲がなくなった。論文は投稿さえすれば良いものかと考えるようになってきた。
学会の減少
学会の大会に対面で参加する人が減少しているのではないかと推測する。一方、ZOOM開催を望む声が高いのではないかとされる。また、論文執筆数が減っていることは学会誌が届くと、その薄さからも推察される。研究に向き合う姿勢・意欲が減退傾向にあるのではないかと、推察している。
学会の大会参加の機会が減った
学会への参加の積極性が低下した。
学会への参加形式。オンラインに限定されるケースが多くなってきている気がします（対面とのハイブリッドを希望）。
学会やセミナーの開催方式。対面に戻すのが難しい。
学会をハイブリッドで企画すると会場的人数が予測できず予算を組むのに困る
学会員の方達と交流が少なくなっていること。
学会会場に直接参加するモチベーションが下がった
学会活動の本質、集う意味。
学会参加には多様な方も参加される場合があるので衛生面などの配慮だと思う。
学会参加者としては対面とオンラインのハイブリッドによる開催を希望しているが、学会運営側（2つの学会で担当）としてはハイブリッドに対応できる人材と財源を十分に持っていないので、うまく運営ができないことがあること。
学会誌の発刊が遅れること。
学会大会に出席するのを億劫に感じている自分に驚いていますし、失望しています。
学会大会をオンラインで運営をしたが、予期できないリスクを事前に考えないといけないことが大変だった
学会大学が対面開催が主流となり、参加ができなくなった。ウェブ開催には高額な費用がかかるが技術やコスト改善がされ、ウェブ開催を期待したい。
学会発表の質疑応答の質の低下
学会費の負担がある
学会離れ
学術集団として社会に適切な発言をする
活動に参加できていないので言えることがない
感染予防

自由記述内容

肝心な当事者への配慮が手薄になってはいないか危惧している。
逆にzoomが普及して良かった
共同研究ができる研究者同士のマッチング強化が必要。
共同研究者・研究協力者とのコミュニケーションが取りづらい。
興味関心が限定的になる
経費の値上がりに伴う、大会主催者の負担
研究が停滞したので、研究成果を発表することが出来ない。
研究に専心している人の熱意を再共有することが必要
研究会、大会への参加
研究活動に対するモチベーションの低下
研究活動の実施
研究者は自身の時間や労力を持ち出しで研究に勤しんでいる現状があることを理解できました。
研究者間の交流が減った
研究発表のハイブリッド開催は難しさがあると思います。完全オンラインだと音声も聞き取りやすいですが、会場での声が聞き取りにくいことが多いです。
研究発表の機会を減らさない
減収により研究資金が不足
現在の課題は、ないのかもしれませんが、ここ1、2年で、マイナス要素も出る気がしております。
現時点で思い浮かばない。
現場のある職場は感染対策からげ現地参加できず発表の機会を喪失してしまう
現場実践者と対面で会える機会が減りました
現場取材ができない場合の対処法がわからない
現地へ出向くことの気持ちの面での距離感が増した
個人としては、全体像が見えづらくなっているので情報を得る努力をしていきたい
個人的な課題になると思うが、対面とオンラインを並行するハイブリッド型の大会開催等によりアプローチがしやすくなった肯定的な面があるが、学会活動としてはいまいち進歩していない気がする。
交通費、研究費の低下
交通費や時間が節約できるため、オンライン参加の人が増え、対面の機会が少なくなり、コミュニケーションの量が減った。偶発的に話し合うことがなくなり、活気がない。
交流しにくくなっていること
交流の減少、意見交換・研究会の減少。
行動制限への賛否と検証及び致命的なデメリット
今のところ特にありません。
今回のパンデミックでは、学会活動についても、当初、試行錯誤の中で対応が決まっていた感がある。この度の経験を教訓として、想定される緊急時のマニュアルをあらかじめ整備しておくことが重要である。
今後のオンラインでの開催方法の採用の可否。
今後ハイブリッド開催が主流になるとと思われる。そのための人材と予算の確保が課題。
懇親会がないため、交流や情報交換が出来なかった。研究活動は一度停滞するとそこから再度ペースを掴むまでが大変。
参加の方法が多様化するのはいいけれど、対面での議論が広がらないと、学術的發展も見込めないのかなと思う。

自由記述内容
参加者が少ない
参与観察、インタビュー調査等においても実践現場に出入りが難しいことが多く、調査研究が行いにくい。忙しい中でZOOMの活用は便利であるが、内容が深まらない。
資料提供方法の多様な思考により弱者への情報提供が不十分であること
実務者なので、特に感じていない。
社会の変化に対して、研究内容が合わなくなってきた分野が大きく、研究者が浦島太郎状態になっている
社会福祉学が人権、人々の福祉を尊重するのであればあまりにも感染対策に引きずられた政策、社会のあり方に警鐘を鳴らしても良かったように感じます。
若い世代の方が新しいツールで開発展開されることに大いに期待している
若者（学生）などの学習・研究の公的支援
若手学会員の勧誘
若手研究者との交流
集まることに意義を感じるが、日程の調整等が難しい時はオンラインに頼りたくなる点。そうするとハイブリッドが有効ではあるが、大会を行う中では手間がかかるので準備が大変になること。
出張が激増した
所属意識
書籍に対する価値が下がった。
徐々に改善してきているので今は課題を感じない
情報の共有化
新たな関係者との出会いが激減した。オンラインでは、どうしてもその場限りの関係になりやすい。
人と人との交流が薄くなり、学会の合間での雑談等交流できる機会が少なくなった。
全く参加出来ていないこと
全国の会員とのリモートでの打ち合わせがしやすくなったことはコロナ禍で唯一良かったことだと思う。リモートで行う活動と対面ならではの活動のダイナミクスを測りながら研究活動を行うことが課題になると思われる。
全面対面となり、オンラインでの参加ができなくなった。
相互扶助の活動をどう広く展開できるか
他の研究者との関わりが薄くなった
他機関の研究者と情報交換や意見交換をする機会が少なくなった。
多様性社会における音楽療法～いま、そしてこれから～
打合せ・情報交換が浅いものになっている
体力も含めて、停滞してしまったことを取り戻すこと。
対面が希望ではあるが感染は心配
対面が良いことは承知だが、移動時間を負担に感じるようになった。負担感を封じ込めて参加した学会の報告が期待にそわなかった場合に徒労感がよりつよくなった。結局内容が第一ということにはなる。
対面でありたい人と、周辺の少しだけオンラインで参加したい人との温度差への対応
対面できなかった。
対面でのコミュニティ形成は重要であることを再確認したが、一方でオンライン化により子育て中の世帯としては参加が容易になったため、オフライン・オンラインのハイブリッド型が望ましい。ハイブリッドの場合、オンライン化の整備にお金がかかるため、オンライン参加の参加費をオフラインより高くすることも検討してよいように思う。
対面でのやり取りが不足している。

自由記述内容
対面でのよりよい感染予防対策 急に感染者が出た場合の代替対策を事前にどうするかについて学会員間での共有
対面での意見交換、研究発表、調査活動
対面での学会でマスク着用者もいることから、学会参加後の勤務に不安がある
対面での学会大会が開催できなかった
対面での議論
対面での交流がなかった
対面での交流をどうようにのこすか
対面での交流機会の減少
対面での参加のハードルが上がったように感じられること
対面での参加意義について
対面での参加者が大幅に減っており、学会そのものに意味を感じなくなってきた
対面での実施機会が以前よりも少なくなってしまったことが残念である。
対面での面接を練習するようなワークショップが少なくなった。必要がなくてもオンラインで済ませる風潮が高まった。
対面ではなかったので、情報が入らないこと。
対面で学会を開催する必要性が必ずしも高くないのではないか、ということに気づかされた。
対面で学会参加出来ない為、研究者同士でのネットワークづくりに個人的に困難を感じる
対面で交流の減少 訪問調査の減少
対面とオンラインの業務整理
対面とリモート面接の差
対面と遠隔のバランス
対面による広い情報交換ができにくい。遠隔での参加では参加者側が必要とする情報しか入らない。
対面に戻って時間ロスが多く、研究時間が奪われる
対面だけの学会に戻ったこと
対面の学会に参加するのが心配になった
対面の学会に戻りつつあるのは良いが、子育てや介護などケア責任を負っている人たちの参加が難しくなる懸念があると思う。主にシスヘテロ男性でケア責任が相対的に少ない人たちだけが中心となって学会活動が展開され、ジェンダーギャップが大きくなるのが心配です。
対面開催がスタートしたが遠方参加が億劫になっている。
対面開催が無いことで発表趣旨が伝わりにくい
対面開催とオンライン開催の目的別位置づけと、ハイブリッド開催のための主催者側負担の減少
対面活動が復活しそのこと自体はよかったと思っている。しかし、コロナ禍で体力が落ち、出ていけなくなっている。
対面活動の困難
対面活動の制限
対面参加が難しい
対面参加に戻りにくい
大会が従来の対面のみに戻りつつあるが、特に若手の研究機会確保を考えると、ハイブリッドは継続したほうがよい。

自由記述内容
大会についてはオンライン開催が増え、参加しやすくなったとは思いますが、対面に比べて質疑応答がしにくくなった。また、大会参加をオンライン限定にされてしまうと、土日開催がほとんどであり家庭で子どもたちがいる環境下での参加になることも多く、時間や空間の確保に少し困っている（出張に出れば親はいないものとして子どもの支援者など手配するが、なまじ家にいるために子育て支援を頼みにくくなった）
大会のオンライン開催により、移動や交通費の負担なく参加できる機会が増え、良い面もあったと思います。今後、対面とオンラインの良さを生かしたハイブリッドな活動方法を模索したい（模索して行ってほしい）と思います。
大会の運営方法
大会への不参加
大会開催地（大会校）が見つからない
大会等の開催参加の回復、会員への支援
大会等はハイブリッド開催が対面でもオンラインでも自由に参加できる面は良いのですが、準備が大変だったり、なかなか不便な部分も多い気がするので、そのあたり何か良いシステムが出てくると良いと思いました。
大都市部での学会に行きにくい
地域における定例会の開催の中止がなければいい
地域の子ども対象の活動なので、子どもと対話しながら方針を決めるのが、実際には難しい。対話の機会や、通信連絡方法が設定しづらい。
地域福祉を中心とした実践と研究を実施している、あきらかにコミュニティが希薄化した課題があると思っている。これに学会としてどう向き合っていくかがカギと思います。
地域包括ケアについて再検討すること
遅れている研究活動の巻き返し
中止や停滞した活動を復活させること。オンラインなどのツールが広がったことがむしろ良かったのではないかと考える。
直接、コミュニケーションを取ることができる場の減少。オンラインでの対応の限界値が認識できていない。
直接の面接調査は未だに警戒される
直接会うことが減り余談からの情報が得られない。他の人の状況が分からない。
特にありません
特にありません。
特にございません。
特にない
特にない。
特にないと感じてはいるが…
特になし
特にはない
特に思いつかない
特に思いつきません。
特に思い当たらない
特に思い当たることはない。
特に無い
特記事項なし
発表は当然なのだが、ロビー活動もオンラインで行えるようになるとよいと思う

自由記述内容
発表数が減少したように思われる
病気や障害を持つ人を対象とした施設・機関への訪問や調査が難しくなった
負担のある大会運営の実態
福祉系は対面開催に拘る傾向があるようだが、オンラインの選択肢も引き続き検討すべきではないか。
分からない
別に無し
理事会開催方式
論文の内容だけしか伝わってこない感じがする。
ブロッック活動、他の会員との交流等

□ Q9. 社会福祉系学会連合もしくは各学会による研究支援に関して、希望があれば教えてください。

自由記述内容
アドバイザー、地域格差
ウェブ開催時の技術協力があれば実行しやすいのではないかと思います。
オンラインの積極活用は地方の研究者・実践者の参加を後押しする
オンラインプログラムをもっと増やしてほしい
オンラインを併用した学会の運営
オンライン上での会議は、効率的に情報を伝達する上では便利で、遠隔地から参加する場合など一つの選択肢が増えたというメリットがあると思うので、今後もハイブリッド形式を採っていただけると助かります。
このような機会を設けて会員の意見を集約していただきたい
シンポのようなものだけでなく、研究交流会的なものもあれば
すぐに思いつきません
スタートアップ支援
とくになし
とくにありません
とくにありませんが、有望な若者への経済的支援、研究費助成枠の拡大などを望みます。
とくにない
とくになし
とくになし。
とくに無し
どのように研究を進めてよいかわからない時に相談できる環境がもっと広く普及すればありがたく存じます
なし
ハイブリッド開催のノウハウを共有して欲しい。
パンデミック、災害時の研究支援の内容を定めてほしい
フィールドワークやアンケート調査
ホームページのアクセシビリティ対応。
ママ研究者への支援が少しずつ広がっていると思われるが、家族に要介護者がいる場合にも、研究を継続できる支援があればと願う。研究者へのベビーシッター、家事援助サービスの助成など。
より多くの若手の参加を期待したい
リモートは最低限で対面での学会を推奨してほしい。
わからない
何々先生の弟子でなければ学会賞を受賞できないとか、理事になれないといった閉塞的な環境を打破した風倒しの良い研究環境。社会福祉系の学会は、他の学会にくらべてドロドロしていて研究しにくいです
科研費の取り方セミナー
介護福祉士だからこそ位置付けされる業務（介護過程作成）など
海外学会への参加支援
各学会で自由参加のできるセミナー等の閲覧容易な情報提供があれば、ありがたいです。
各学会において、コロナ禍の後でも存続することに一定の意義があると望みをつなげて欲しい。
各学会の活動内容を知りたい
各研究機関がコロナ禍においてどのように研究支援を行ったかの報告

自由記述内容
学科によって研究支援に対するスタンスが異なるので、何ともいえない。
学会での倫理審査委員会があることで、職場に委員会がない場合でも学会員として研究活動を継続しやすくなると思う
学会としての研究チームで社会の要請にこたえる研究を実施する。研究助成制度をつくる。
学会の紹介
学会を対面で開催してほしい。そうすることで研究発表時にたくさんのひとと話すことができ、それが自身の研究を深めることにつながると思う
学会員ではない実践現場の方に研究が活用されるために、共同研究等有効である。前提として研究倫理に関して啓発普及活動が必要である。
学会開催をなるべくハイブリットで行ってほしい
学会参加を認定社会福祉士の単位として認めることをもっと積極的にしてほしい。
学会誌・発表データ等のオープン化
学会等は対面だけでなく、ハイブリットや、後日オンデマンド配信をしてほしい。
学会内外に拘らず活動の幅を広げること
緩急者同志の交流の機会の創出
共同研究ができるようマッチング機能があるとよい。
共同研究などの若手支援
教育福祉関係者の困難解決を主題とした研究と実践で社会に発信すること
近くに適当な指導者がいない人もあるかもしれないので、倫理申請、抄録や発表原稿のチェックなど形式についてのサポートがあると、助かる人がいるのではないかと思います。
経済的支援
研究の刺激がほしいので、若年層のみを対象とせず、あらゆる層を対象とした研究活動支援（研究会など）
研究支援をする側の仕事ばかりがまわってきて、支援をしてもらったことがないためわからない。
研究時間の確保が年々厳しくなっている。
研究者が研究活動を行いやすい環境整備（研究の意義を発信していくなど）が必要に思いました。
研究者を養成する教員が少なくなっている状況を鑑み、大学院教育と学会が連動して研究者を養成する仕組みを作ることなのではないか（研究の楽しさを伝える仕組みや裾野を広げることなど）と思う。
研究初学者に対して、研究への取り組み方、調査方法や分析方法のノウハウ、論文の作成・投稿に向けた指導や助言があるとありがたいです。大学院修士課程を修了したとはいえ、まだまだ分からないことが多いです。
研究助成
研究助成がもっと柔軟に活用できる仕組みがあればいい。
研究助成をもっと拡大してほしい
研究発表・実践発表の場がもう少し沢山あると良いと思う
研究発表で現地に行く費用が所属機関から出ないので、ハイブリッドで現地かオンラインかを選べると助かります。
研究費の配分
研究費助成
研究費助成の拡大
研究費助成制度の充実、学会間の共同研究の促進、など。
研究費用の助成、初学者向けの研究倫理を学ぶ支援
研究費用補助

自由記述内容
研究倫理審査が求められる時代に、研究協力者から同意を得て入手した研究についても、成果を還元しやすいように、学会として情報発信をしていただきたい。
現在のところ、思い当たりません。
現在は特に無し。
現時点で思い浮かばない。
現場にいる者としては時間もお金もない。研究結果は現場に還元してこそ価値がある。研究費助成が必要。
現場実践で研究活動を行う者に対する研究支援を検討していただけるとありがたいです
現場実践者の研究・論文作成へのサポート
現状、オンライン活用も図られるようになったので、オンライン・ツールを引き続きうまく活用していただきたい。また、活用法について会員へ案内いただくのも良いと思います（情報提供として）。
個人で研究活動をしている者への支援を充実していただきたい。特に倫理審査、助成金など。
今のところ思いつかない
今のところ特にありません。
今は思いつかない
今は特に思い浮かびません。
今は特に無い
今は無し
財政補助
産休・育休中の学会費免除をお願いしたい。
思いつかない。
思い当たりません。
支援の目標は「対象者」が社会資源として位置づくことと考えています。実践事例を積み上げていきたいです。
私は社会福祉の歴史に関心があるので、在宅で研究活動を多面的にやってみたい。そのためには関心のあるテーマとの交流を深めてみたいと思う。その音頭をとり、各学会が参加自由なネットをつくってほしい。
実践からアカデミアに転職して間もなく、研究ネットワーク構築の機会を創出していただけると嬉しいです。
実践しながら博士課程に進学・在学する者へのモデルを見せてほしい
実践をふまえた研究であってほしい
実践研究の充実。実践者への実践研究の指導や支援を充実してほしい。
実務者の研究への参画の機会を増やしてほしい
実務出身者が多いので研究の基礎を学べる講座などが必要では
社会福祉に関するものは、アンケート、分析よりインタビューにより深めること、深掘することの方が翻意や核心が見えてくるように思います
社会福祉の場合パンデミック時における支援活動は研究活動ともなると思います。現場へのアプローチ、アクセスへのサポート
社会福祉を基盤とする事業組織マネジメント教育を支援
若い研究者ならびに退職後の会員への支援等
若い研究者の人達が活躍できるように、研究奨励賞や助成金がある程度あると良いと思います。実践者の方が研究を推進できるようなバックアップがあると良いと思います。

自由記述内容
若い先生方の研究支援を手厚くすべき（参加費を半額にするなど）。学会発表時にベテランの先生方から文句を言われ、ダメ出しばかりされ、お金をかけて発表をする意味がない。発表環境をオープンに、そして多様な意見が言える場を作るべき。若い先生が学会に参加しなくなることも当然のように感じる。
若手への研究助成
若手研究者の交流
若手研究者支援は、重要であるが研究に熱心に頑張っている研究者に世代にも関係なく支援を希望する。　くし
若手向けの研究助成の拡大
出版助成
初学者への多様な支援
初心者指導
助成金
助成金の申請をするにしても様々な手続きや縛りがあり、本来の研究活動の注ぐ時間が確保できない。そのため、もう少し簡単に助成金が得られる仕組みを作って頂きたい。
女性は子育てと仕事で研究活動の停滞期がある。コロナも含めて停滞期を乗り越える支援があると助かる。
小規模な研究会を開催してほしい
少額でも必要としている研究者に行きわたる支援（特に他から研究助成を得られていない研究者に対する支援）
申請しやすくしてほしい、ハードルをさげてほしい
数年間に渡る継続的且つ、すぐに結果を求めない柔軟な研究支援
性の多様性に対する配慮や研修をもっと行って欲しい。
政治との連携とニーズへの反映
政府（行政・立法・司法）への陳情や提言
積極的な支援を希望する
先程の質問に書いた通りです。
他分野学会の対策等を活用
多様な研究支援についての周知の徹底を行うとともに、支援を活用しやすくすること。
対人援助職には対面で人と関わる上での間合いや空気も含めた高度なコミュニケーションを習得する必要がある、そうした学びの場を減らさないようにしてほしい。
対面だけでなく、今後もオンラインなど活用しながら柔軟に対応してほしい。
対面での学会がしばらくなく、交流しづらい状況が続いたため、グループでの研究や若手の採用活動など厳しい。そのため交流の場が欲しい。
対面での学会も積極的に開催して欲しい。
対面のみ開催になることが増えてきたが、オンライン対応を可能な限り残してもらえた方が、特に地方在住の会員にとっては大変助かると考える。
対面の場合、院生や非常勤講師を主とする研究員に対する交通費の支援。
対面式をゼロにしないでほしい
大きな社会福祉の視点で、現代社会が抱える諸課題に関する統合的研究の必要性を感じます。そうした横の連携を推進するための支援があると望ましいように思います
大会の開催をそれぞれ異なる時期に実施すればありがたい。

自由記述内容

大学などの研究機関に所属していない実践者に対する研究支援を充実させてほしい。私は実践者から大学に入り、これで研究で給料がもらえるようになったと思ったのに、大学勤務時代の方が研究ができませんでした。実践に戻り、引き続き研究をしていきたいので、学会の支援があれば嬉しいです。

大学院教育の見直し

大学院生が学会に参加しやすいようにはなっているが、入会しやすいように学会費が軽減されたりしてほしい。

大学院生への配慮

大学等の研究機関に所属していない者への研究倫理審査を行ってほしい。

大御所ばかりが方向性を決めるので全く楽しくない

誰でも利用ができる第三者の倫理審査委員会があると、研究倫理のハードルは下がると思う。

担当が増えずに実習負担が増すために研究時間がますます無くなる

地域ごとに対面の機会を増やすなど意識してネットワーク作りをできたほうがよい。

地方開催の場合は、ハイブリット開催も視野に入れて欲しい。学会宿泊費の補助。研究を遂行するために必要な図書、ILL費用の補助（投稿論文に関して、後払いでも補助費が出ると嬉しい）。

調査研究以外の歴史や哲学，原論などにも価値を置いてほしい

的確な情報収集によるニーズへの迅速な対応

電子機器への補助があるととても助かります。

動画の配信

同じ年代の研究者の先生方と研究と業務の両立の話などができる場が欲しい。

特にありません

特にありません。

特にありません。今後もよろしくお願ひいたします。

特にございません。お働きに感謝しています。

特にない

特にない。

特になし

特になし。

特に希望が思いつかない

特に希望はない

特に思いつかない

特に無し

特記事項なし

日本家族社会学会が継続的に実施している全国家族調査のような全国調査データの収集・分析が研究活動の活発化を促進するのではないのでしょうか。とくに若手研究者には、有益に思えます。

年会費の減免

発表までの審査の関門を緩やかにし、軍事やコマーシャルに使われないことだけを避けたら、あとはできるだけ自由に研究・実践できるようにしてほしい。

非営利活動への支援

非常勤や若手への研究資金支援

不正を疑われる時代なので、不正防止マニュアルなど

自由記述内容
福祉系に対しては特になし
補助金制度の充実
包括的に効率よく結びついて欲しい
無し
様々な研究のフロントラインを紹介するオンラインのイベント
様々な実践を発信してほしい。
量的、質的研究方法についての学習会を開催して欲しい。
倫理規定の統一、査読体制の協力
倫理審査について現場実践者向けの研修機会が提供される
倫理審査の提供
倫理審査の必要有無を独自に判断してほしい。
倫理申請に関する相談に乗っていただける支援
連合内あるいは近接の対人援助関連学会との共同企画はどうか。気か宇は、
論文をオンラインで公表するようにして欲しい
論文指導
情報発信及び環境整備等に関する共通認識を図ること